

『敬愛する大先生、——貴方のお手紙を拜見して、私はどんなに幸福に思つたこととせう。あのお手紙を頂いて二重の喜びを得ました。それは第一にあのお手紙は先生から來たこと、第二には私の小さな頭を掻き亂してゐた怖ろしい煩悶の中に一筋の光明を與へて下されたことなのです。私は先生のお手紙で深く考へました。そしてたとへ先生が未來に起るべき事が見えても、それは避けられないことではないのだと私によくお教へ下された意味が分りました。あのお手紙は本當に私を救つて下されたのです。事實、私は今まで、私達はどう何物の主ではあり得ない、自分自身でさへも自由にすることも出来ないのだと云ふ考へに獨りで悶えて居たのです。次に私に怎んな宿命を信じさせたあの事を聞きたいとの御尋ねによつて、私は出来るだけくはしくお話致します。』

それは七年前、一九一〇年の春のことでした。其の時分私達はヘレン、シュミットと云ふ獨逸の婦人と昵懇にして居りました。その婦人は奇妙な力を有つてゐる巫女でした。私のお母さんはこんな神降に凝つて居た時ですから、ある日此のシュミットさんに神降して貰ひました。

私はその頃まだ十二、三才の子供でしたから學校へ行つて居りまして、その時は家に居なかつたのです。それでもお母さんや家の年寄つた召使から時々其の話を聽いてました。

その時、シュミットさんは手を机の上へ載せただけで急にぶる／＼と烈しく震ひ出したのださうです。先生、若し魂があるものとすれば、その魂と通信する仕方は御存知の事と存じます。筋肉の力では迎ても持ち上げることの出来さうもないあの大きな重い机が魂が乗りうつつてコトコトと規則正しく動き出したのです。其の時お母さまはその魂の名をたづねました。すると魂は自分で、アントンと云ふ名前だとアルファベットで告げました。巫女は此のアントンと云ふ名前も知らなければ、その人も知らないのです。アントンと云ふのはアントン、フィードラーと云ふオーストリア人で、私の叔母、お母さんの妹の前夫の名前なのです。叔母は二度目の夫としてアドルフ、リースベックと結婚しました。此のアントン、フィードラーは私の叔母の一番近い身内です。お母さんは叔母の未來について何か聞かうと思つたのです。そして最初に「リースベックは永く財産を維持して行きませうか」と質きました。すると魂はぶつきらほうに「否」と答へたのです。そこで再び。

「何年後に彼は財産を失ひますか」ときくと、

机は二つ鳴つて、「二年間」と答へました。

お母さんは次に「彼は財産を失つてから後も長く生きて居りますか」と問ふと、その答へは明

隙に「五年間」とありました。それからお母さんは何うして彼が死ぬのであるか知りたいと思ひましたが、叔父は突然に死ぬとばかりでした。それでは病氣、事故、自殺、難船、或は犯人の手にかゝつてかと聞いても、魂は「否」と答へる丈でした。その時分は誰も戦争のことなどは夢にも考へてゐなかつたのです。最後に私達が「リースベツクの子供は彼が死ぬ時何才になつてゐますか」と聞くと机はつきりと「十七才」と答へました、それで何もかも済みました。

先生、私は自分でそれを註釋する力はありません。私はたゞ事實だけを申上るのです。母上さんはすぐこの事を叔母に話しませんでした。それは叔母がそれを夫に話されるのを惧れたからです。不幸にも恐ろしい程本當に豫言は當つたのです。一九一二年の春、丁度豫言から二年後、私の叔父は大きな投機に手を出して財産を無くしました。間も無くお母さんは未だゼネバに居た叔母にその豫言の事を語り、又、その後の事も告げましたら、

叔母はそんな馬鹿なこと、「そんなことを信じられません」と言ひました。けれども、不幸にも豫言の第二番目も矢張り實現したのです。其後母と私は折々此の豫言の事を話し合つてゐました。そして私は「魂が告げたことが本當かも知れない、叔父さんは一九一七年の初めに死ぬんでせう」と言つて居りました。

先生、アドルフ・リースベツクは一九一七年二月十二日に戦地で亡くなりました。突然の死亡でした。頭部に弾が當つて全く突然に死んだのです。その時私の従弟のマリオは十八才でした。魂が私達に的確には告げ得なかつた、病氣でもない、事故でもない、犯罪でもない、想像される如何なる死でもなかつた死といふのは此の戦死なのでした。

先生此の手紙と共に私の叔母が夫を失くした時私達に寄越した手紙の一部をお送り致します。それは獨逸語で書いてありますが、先生は無論お読みなされと思ひます。そして私は此の手紙の終りに母に署名して貰はうと思ひます。

私は此の不思議な豫言が先生の御研究に幾分でもお役に立てば幸福と思ひます、そして大戦役後先生が未來の豫見について御發表になる御著書を一日も早く讀みたいと御待ちしております。私は今まで、私の叔父の死は未だ弾丸が銃口を飛び出さない前からもう定まつた運命であると云ふ考へに苦しめられて居たのです。そして凡ての事は絶対に避けられないものではないと云ふ事の御教示を蒙つたのを本當に嬉しく感じるのでした。

先生の貴い時間をお妨げした事を御許し下さい。私が幾度も先生に御伺しやうと思ひながら、その都度躊躇して居たのは全くその爲なものでした、併し、今は斯うして先生のお手紙にお答へ出

來るのを嬉しく存じます。私の申上る事は全くなのです。

佛蘭西天文學會の貴方の教子

ウエラ、クンツラー

私の娘の書いた事柄はそのまゝ全部事實であることを保證します。

E、クンツラー

この疑ふ餘地のない、誠實さの溢れた手紙について兎や角註釋を試みる事は、讀者にとつて餘計な事であらうと思ふ。談者が私に呉れた最初の手紙に溢れてゐる、堪え難い苦惱と限りない好奇心からしても、私はこれを信ぜざるを得ない。私は茲にも未來の豫覺に關する代表的な例を持つてゐる。

その一見パラドックスに似た定命論との一致について述べて見やうと思ふ。

この様な事實を否定する事は最早不可能である。すべての否定は無智——或はこれと同様な心的狀態——の明かな例證たるに過ぎないであらう。

これに關聯して、トーチコフ將軍の豫告と私の註釋が一九一二年三月及四月の「ラレヴエー」に發表された時、フレデリック、バツシイは私に次の様な手紙を寄越した。

「フラマリオン足下——私は貴方が彼の論文中に述べて居られる豫告の可能性を信じ兼ねるものの一人であります。何故ならば、事件が豫め絶対に決定的なものである以上、最早、自由意思の

存在が否定されてゐるからであります。ですが、私は貴方が引用された様な事件の一つを茲にお知らせしやうと思ひます。

先づヂー、ルノートルの著、「ローリー侯爵と一七九〇——九三年佛國陰謀」の中にも同様な事件がある事を述べて置きます。

サン、オーリエル夫人——陰謀者の一人であるノーヤン氏の女——は或朝その父に、父が逮捕されて巴里の革命裁判に附せられる事と、自分が首尾よく父の命が助かると云ふ事などを語りました。父は勿論そんな事があらうとは少しも信じてゐなかつたのです。この話は夫人——夫人はずつと後に死にました——の直話で、その令息もこれを保證して居ります。令息は其の當時十五歳位で、後王政復興及ルイ、フィリップの時フランス、アカデミーの一員として重要な人物となつた人であります。

此の事件を如何に解釋すべきものでせうか、御教示願はしう存じます。

一九一二年四月二十七日

フレデリック、バツシイ

この豫告は正しく實現されたのである。

人間の自由意思の問題は確かに研究に値する事項である。

フランスの誇とも言ふべき、最も偉大な、最も洞察力に富んだ人物で、同時に亦最も純潔な著作家である、かの大幾何學者ラプラスの著述を讀む毎に、今も尙切實な審美的な喜びを禁ずる事が出来な
い。これは自由意思に關する彼の著作、「蓋然性に關する哲學的論文」の中に收められてゐる。彼は次
のやうに述べて居る。

『あらゆる出來事は、自然の大法則に何等關係を持つて居ないと思はれる程の些細な出來事で
も、太陽の運動と同様に、自然法則の必然的結果である。これ等の事件を宇宙の全組織に結び附
ける係連を知らなかつた結果、これ等が規則的に相繼いで起るか。又は外面的に何の順序無く起
るかに従つて、或はこれが終局の原因であると考へられ、或は偶然に基くものと考へられてゐ
た。併し、この想像的原因は吾々の知識の範圍の増大するに従つて漸次撤回され、遂に健全な
る哲學の前には全く消失するに至つたのである。この哲學は吾々がその眞の原因である無智の表
現をのみこれ等の中に看取する。』

實際の事件とこれに先立つ事件との關係は、事物はこれを生ずる原因無くして存在し得ないと
いふ自明の原理に根據を持つてゐる。この「充足理内の原理」として知られてゐる公理は、如何
に些細な事件にでも適用される。どんなに自由な意思でも決定的の動因なくして事件を生ぜしめ

る事は出来ない。若し全く同一な二つの状態に於て、その一方に於ては自由意思が働き、他方に
於ては働かないとしたならば、その選擇は事實何等原因を伴はないと言ひ得よう。その場合には
ライブニッツの所謂エビキュリアンの盲目的選擇である。この反對意見は、意思の種々異つた事
物間に於ける選擇に對する不確かな理由を見失つて、意思は自ら自身を決定して何等理由を伴は
ないものであると自ら強ひて信じやうとする心の錯覺である。

故に吾々は宇宙の現在の状態は、その過去の状態の結果であり、又次いで來るべき未來の狀態
の原因であると思ふべきであらう。與へられた瞬間、宇宙の原動力たるあらゆる力、及び宇宙を
成してゐる存在の各個の狀態を直ちに了解し得る様な知力、そしてその知力が宏くこれ等の事實
を明かに分析し、又宇宙の最も大なる天體の運動と最も小なる原子の運動とを同一の公式中に包
含する事を得るものならば、その様な知力にとつてはすべてが確かに解決さるであらう。そし
て未來も過去と同様に一目瞭然にする事が出來やう。僅かに天文學の上に賣らされたかの完全さ
の中に、人間の心に有つてゐるこの知力の微かな輪廓を示してゐるのである。』

今暫くこの推理を論議して見よう。

吾々は普通この説の起源をラプラスに歸してゐるが、すべての思想家は彼以前に於て既にこれを述

べてゐる。けれども、これは當然歸着する事であるが、矢張りその起源が「ラプラス」にあると言つても差支へない。この蓋然性に關する著書の第一版は、一七九五年ラブレラが師範學校に於て講義した教程から成つてゐる。

併し一七八七年イマヌエル、カントはその著「純粹理性批判」に於て次の如く書いてゐる。

「時間とその正しき順序の見地から見て、若し吾々がある人の心を觀破する事が出來、その心が外的行爲と同様に内的行爲に依つても自身を啓示するならば、且我々が、その如何に微かな動機も、そして、同時にその外的影響をも理解し得るならば、彼の未來の行爲は、日食或は月食の豫測と同様に正確に豫測し得る筈である。」

併し、カントも亦この説の創始者ではない。これは最も古い著作家の間にも見出される説である。

例へば羅馬のキケロの如きがそれである。「占斷」に關する彼の論文に於て、後はその弟クインタスが未來の豫見と宿命との關係を説明した事を書いてゐる。彼は言ふ――

「占トを説明するためには、神、運命及び自然にまで溯る必要がある。理性は萬事が運命に依つて支配される事を我々に信ぜしめる。私は希臘人が *αἰὶμα* と命名したもの、即ち相聯關して結果を生ずる一團の原因を指して運命と呼ぶ。永遠のそのものの中にその根源を有する不變の眞理がある。これに依つて自然は未來のあらゆる事件に對し既に充分なる理由を持つてゐる。かくして運命はすべての事件の永久不變の原因、即ち過去、現在、未來の事件を解釋する原因となるであらう。かくして吾々は觀察に依つてあらゆる原因の結果を知り得るに至るであらう。然らずんば、靈感及び夢を説明するものはこの原因と結果の連鎖である。

序だが、あらゆる事件が運命に依つて支配されるからには、そして又人がすべての原因の間の關係を知悉し得るならば、決して思ひ誤る事はないのである。實際事件のすべての原因を知る者は、全未來を理解し得ない事はない筈である。」

この様な推理はそれ自身に於ては誤謬ではない、繰返して言ふが、ブラース氏の言ふ所は眞理に近いものである。原因なくして結果の生じない事は明かである。併し乍ら宿命、即ち絶對的定命論の結論を、この單純な常識論を以て裏書する事は出來ない。

ラプラス——彼の著作に依つて私は驚愕されて來たのだが——に對する深い讃嘆の情を以てしても尙、彼の自由意思の絶對否定には賛成する事が出來ない、讀者諸君は私がこの困難な點に關して私の記録の中に書いた事を既に御承知であらう。

「地上の如何に自由な意思も決定的動因なくして行動する事は出來ない」これは疑ふ餘地がない。併し選擇に關係する原因の中には、吾々自身の個性も含まれて居り、而も看過すべからざる原因である事を忘れてはならない。

或はこの個性はその優越した動機によつて行動するものであり、個性そのものは以前の原因に基くと言ふ者があるかもしれない、勿論それには議論の餘地がない。併も、個性は吾々の品性と平行して存在し、又この場合更に重要なものであり、更に確かなものである事は、吾々が次の様な事を強く感ずるからである、即ち事件が骨折甲斐のある場合、吾々は心の中で考慮に考慮を重ねて、そのすべての責任感を以て決定するといふ事を強く感ずるからである。

秤が丁度平衡を保つてゐて、どんなに軽い重さでもこれを一方に加へるとの平衡が破れる場合のある事を私も認める。併しこの僅かな重さは吾々の空想でも、氣まぐれでも、意思でも、又豫め分つてゐる結果を破る事に對する吾々の物好からでもよい、——一言にして言へばこれ等は吾々の自由の

行使である。すべて心の幻影に過ぎないと斷言する事も、又、證明された眞理としての假説であると言ふ事も共に不可能である。「充足理由の原理」は、これを良心といふ法廷に於て論議する時、吾々自身の中に存在するものである。

吾々が優越した動機に従つて決定する事は、吾々がその性格に従つて行動しないといふ事にはならない。吾々自身の意思はこの性格と聯合し、而もその奴隷とはならない。アリストートルはその「天國」に關する論文に於て、「飢と渴とに苦んでゐる者が、食物と飲料とから同じ距離に居る場合と同じである。彼は結局何れにも行く事が出來ず、そのまゝ動かずに止るであらう、」と書いてゐる。ダンテも同様な事を *paradiso* の第四卷にかう述べてゐる。ブリダン（Bridan）は人を驢に置き換へただけで、これと同じ推理を述べてゐる。

人にしても、驢にしても飢餓のために死ぬ事はなかつたらうとは、何人も心の中で信じてゐる。天地間に機械的なものは何にもない。

豫知と自由意思とは絶對に兩立しないものであらうか。これは古代及近代の著作家の等しく述べてゐる事である。

「古代の占卜の話」の著者ブーセクラシー氏は、「自由意思に基く不安定な未來は、宇宙の秩序を見

て感得し得た確乎不動の法則に對する觀念の様な譯には行かない。哲學的理論を豫知する普通一般の本能は、未來を避け得ない決定的のものと考へる傾向は必ず持つてゐる。そして未來は正にそれが避け得ないものであるといふ理由を前提として却つてこれを豫知する事が出来ない様になつてゐる。豫知と意思自由との間には絶えざる衝突があり、一方は他方を排斥する。」と書いてゐる。セクスタス、エムピリカスは「未來の事件が必然的に或は偶然的に起らねばならないものならば未來の豫知は全然無用なものであり、自由行爲に依つて生ずるものであるならば、未來の豫知は全然不可能である」と。教へて居る。

シヨウベンハウエルはその著「自由意思論」に於て、「若し例外なしに凡らゆる事件に適用さるゝ因果律から生ずるすべての宗教的必然性を認容しないならば、未來の豫知はすべて不可能であり、不合理である」と書いてゐる。

明かに自由意思と未來豫知との衝突、限りなき矛盾は一般に信ぜられてゐる。これは吾々が未來の豫知を必然性と混同する誤謬であると言はねばならぬ。

一八二五年十月十三日、ゲオーテとエツケルマンとの會話の中に次の様な言葉がある。

「吾々は何を知つてゐるか、吾々のすべての知力を以てして、一體今何處に立つてゐるのか？人は世界の問題を解決するために生れて來たのでない、問題の範圍を了解し、然る後その知り得る問題の限界内に於てよく身を處するためである。

人の能力はよく宇宙を測る事は出来ない、その知力を以て事物の全體に近附かんとする希望があつても知力が然く見地を制限する時、それは無駄な骨折りである。人の知力と神の知力とは全く異つたものである。

人に意思自由を許す事は直に神の全能の終りを意味する。逆に若し神が私の未來に於てなす事をすべて知り給ふならば、私は神の知り給ふ事以外の事を爲す自由を持たないわけである。私はこのデレンマを私の僅かな知識の一例として、又神の秘密に觸れる事の禍である事を示すために述べるのである。

又最高の眞理の中でも世界の幸福に貢獻する眞理のみ説明をすればよい。他の眞理は吾々の心の中に秘めて置かねばならぬ。併し隠れた太陽の和かな光線の様に、これ等の眞理は吾々の行爲の上にその光を投げる事であらう。」

ゲオートはこれ以上論を進めなかつた。何故か？

通常事件や、偶然の出来事は吾々の信する以上に吾々に影響を及ぼすものである。その日常生活の行爲を審かに分析して見ると直ちに理解し得るであらう。自由意思は極く制限された範圍に於て活動するのみである。「計畫は人に在り、成敗は神にあり」と言ふが、これは全く正しいとは言はれない。

神即ち宿命——ラテン民族の所謂 *Fatum* は吾々に與ふる自由を著しく制限して居る。

茲に前の謬に反對な謬がある——謬は必ずその逆を有つてゐるものである——「天は自ら助くるものを助く」と言ふのがそれである。

然り、人は計畫し、終局は成敗する。併し、同時に吾々は吾々自身の運命の建設者である。

要するに 眞理は宿命を敷衍する哲學者の所謂形而上學の中には存在しないで、却て今引用した普遍的な箴言の中に總括された一般的な、そして實際的な常識の中に現はれてゐるのである。

私の説明は假定説に基礎を置かないで、専ら積極的な觀察事實の範圍に止る事に充分の注意を拂つて來た。自由意思の吾々の感じが幻覺であるといふならば、それは既に假定説である。私は机に就いて自ら何を爲すべきかを問ふ。私は熟考する、推理する、甲か乙かを決する。私は意思に附帶する環境に欺かれてゐる事を自ら信する。反對に又、若し私が理性を持つて居ないならば、私は唯だその事件の

起るに委せるであらう、そして自由は自分に好ましく見えるものを選択する事に存するといふ事を主張する。如何に私が絶對的である事を欲しやうとも、それは相對的であつて絶對的ではない。吾々の計畫は常に覆され、一つもうまく行かぬ日すらもある。それは極めて不完全ではあるが、議論の餘地のない吾々の感じであり、又この感じを抑へて、これに代ふるに吾々は假定説を以てする權利を持つてゐないのである。それは天日の如く明かである、あるものはこれを一假象に過ぎないと言ふかもしれない。然り、太陽の如き、景色の如き、樹木の如き、肘掛椅子の如き、家屋の如き假象である——これ等はそれが吾々に與へる印象に依つて始めて知り得らるゝものであるが——併しこの假象は現實にその根底を持つてゐる。

その中には日常の觀察事實、永久的な、合理的な、論駁すべからざる事實がある。

確かに吾々はあまりに受動的であり、根本的な決定と云ふ事がない。吾々が心の中に議論を戦はし、充分な反省の後に決定した場合にも、尙それは常に優越した動機に従つて行はれたものである。即ち吾々の伴りの意志自由は、一方の皿に重みを加へればその方が下る秤の如きものであるといふ反對が起る。疑もなく吾々は背嚮輕重を考へ、冷靜に推理する時、自分に好ましく思はれる方に決心する。併し吾々の理性が働くのは正にその間にあるのであり、如何なる詭辯も吾々の心の中のこの確信

を抑へる事は出来ない。その反対の場合には吾々が不合理であるとすらも感ずる。時折自分の判断に反対して行動をしなければならぬ時、吾々はある點に於て強ひられて居るとも感ずるのである。

自由意思に關しても、ジュベナルが横柄な婦人に言はせた次の様な斷言は最もよい議論ではなからうか。

「Elic volo; sic jubeo; sit pro ratione voluntas,」「私はそれを欲する、それを命ずる、私の意思は唯一の理性である。」と。

「そは予が喜びなれば……」とはルイ十四世が後に王威を落す因となつたかの誇を以て言つた事である。

疑もなく吾々はある行爲の自由を與へられてゐる。吾々は選擇する事が出来る、優越した動機に従つて決定する事が出来る。併し絶對的な自由意思を求める事は何うであらうか。各人はその氣質、思想、好みに従つて導かれ、そして又その環境、事件の鎖に従つて引きづられて行くのではなからうか。如何にして吾々はかの鎖から自由に離れる事が出来やうか。吾々の仕事が自分を導くか否かを知らないで大小の仕事を始める。そして自身の生活を省みる時、その個人的の自由が如何に微弱なものであるかが明かに分る。吾々は旋風の中を引きづり廻されてゐるのである。人は計畫し、運命は成敗

する。この運命は普遍的靈氣であり、吾々はその一小部分たるに過ぎない。しかも吾々も亦靈氣である。絶對的自由意思か？ 否々相對的自由意志。

吾々の意思自由が、皮相な人々が考へるより以上に、多くの制限を受けてゐる事は疑ひない。整然たる宇宙の進行は恆に吾々を導く。天文學上、氣象學上の狀態、寒暑、風土、靈氣、光、環境、遺傳、教育、氣質、健康、意思の力に支配されて吾々は生活する。その自由は、ヨーロッパからアメリカに船客を運ぶ船に乗り込んだ一乗客の有つてゐる自由のやうなものである。彼の航海は豫め定められてゐる。彼の自由は船の欄干内に限られてゐる。彼はその浮城の上で、歩み、語り、讀み、草煙を吹かし、眠り、カルタを取る事が出来る。併しその浮城の上を去る事は出来ない、吾々の生存の計畫圖は豫め畫かれてゐる。それは宛もある機械の各部分の運動の如きものであり、吾々自分自らその役割を果さねばならない。この條件付きの自由はたしかに多くの制限を受けて居る。又、何人にも同様に存在してゐる。諸君が友人に御馳走に招かれたと假定する。食膳が出される。諸君は白葡萄酒と赤葡萄酒、ブルガンヂイとボルドー、ビールと眞水、その何れをも選び得る。そして又自ら諸君の腹に相談して諸君の理性を働かして、これらを選ぶ自由のあることをはつきり知つてゐる。

若し、何時でも、どんなに些細な行爲であつても、これに注意して觀察するならば、吾々の意思自

由が非常に制限されて居り、朝眼覺めた時爲さうと決心した事が無數の原因のために妨げられるが、それでも自分の主な意思は多少なりとも實現され、其處に選擇の自由が感ぜられる事を明かに知るであらう。

これは大事業に關しても、つまらない仕事に就いても同様である。吾々の最も重要な行爲は、環境及び自分の意思の兩方に依つて決定せられる。

けれども、自由意思と人間の責任觀念を危くする事なくして、未來の豫知を承認する事は出来ない。現在は決して止る事なくして、絶えず未來に連續する。常に何事が起る、併し若し人間の意志が事件の鎖の一部を成すものであり、これに依つて相對的自由を贏ち得るといふ事を容認するならば、それは必ずしも避け得られないものではない。意思の決定した事は現實となるが、併し又意思が決定しなかつたかもしれない。未來は過去の連續であり、未來を見る事は過去を見る事と本質的に異つてはゐない。この事實は決して、人間の意思が事件中の行爲の一因であると認める事を妨げない。起つた事とは違つた、何か外の事が起つたかもしれない、そして未來の豫知に於て考へられる事は即ちこの外の事なのである。

事件は原因の鎖の結果である、假令ひそれが一七九三年、一八七一年の巴里に於て見らるゝ様な、

(そして斯かる事は吾々の愛する地球の到る處に見らるゝのであるが)、その反對者を射殺すべし、絞首すべしと命ずる復讐に燃ゆる力であらうとも、或は革命の眞中に於てその暴行を止め、進歩を助けた博愛的の力であらうとも。惹起さるゝ事件は、幸福と禍、專政君主とその犠牲者、正者と不正者、無情と同情、智者と愚者、血に飢えたるものと平和を好むもの、利用する者と利用さるゝ者、盜賊と被害者の存在を妨げる事はない。

結果と原因との繼在に依つて未來の事件を豫見する事は、假令如何なる方法に依るものであらうとも、意思自由を含むすべての有効な原因の存在と調和せられ得るものである。

未來は過去と同じく神祕ではない。若し月が地球の周圍を廻轉する運動、地球が太陽の周圍を廻轉する運動のために、一九九九年八月十一日午前十時三十分、太陽、月、地球が一直線上に來り、月の影がフランスに投ぜられ、太陽の皆既食が巴里の北部に於て二分間觀察せられるといふ事を今日豫測するならば、この豫言の中には、一八四二年七月八日ベルペンに起つた日食を溯つて計算するのと同様に、何等の神祕も不可思議もないのである。アラゴのその郷里に於ける觀測に依つて有名となつた一八四二年の日食の時、私は生後四ヶ月十一日であつた、一九九九年八月の日食の時には私は既にこれより前に死んでゐる事であらう。併しこんな事は何等の價值も持つて居らない、今日私にとつ

て、諸君にとつて、又現代のすべての人々にとつて、未來である所の事は、他の人々に取つては現在の事であり、又ついで過去の事となつて了ふのである。

言ふまでもなく星の運動には自由がなく、星にとつては宿命論は絶對的であるが故に、天文學上の事件と人間界の事件とを比較するのは抑も當らない事であると反對するものがあるかもしれない。併し之に對しては、若し自由意思が積極的原因の中に含まれてゐるならば、その効果は星の場合に於ても同様に感ぜられるであらうと答へる事が出来る。

惹起されるすべての事が積極的原因の必然的結果であり、その中にはどんなに卑しい罪でも、羅馬の炎上も、ネロの迫害による基督教徒の殉難も、獨逸人の白耳義疎も、その市民の暗殺も、ルーベンの火災も、レムゲ城の砲撃も、最後の獨逸戦争の憎むべき虐殺も、包含されてゐる事は明らかである。併し各行爲者はその積極的原因の一部分を成して居り、一部分の責任を持つてゐる。又、ジアンダークが妖術を使ふといふ罪名の下にコーシユーン僧正に依つて火焙りの刑に處せられた事と、後に至つて他の僧正に依つて聖徒の列に加へられた事もまた機械的連鎖であり、科學者ラボーアージュ、天文學者ベエーリー、詩人アンドレ、シユミール、哲學者コンドルセル、盲目的な恐しい革命の犠牲者達も要するにこれ等の因果に含まれるものである。そしてこれ等の事は皆決定的の原因によつて齎ら

されたものではあるが、必ずしも避け得ない事ではなく、その成行は或は異つた風になつたかもしれない。この事から責任が存在しないと結論すると渾沌を意味する。一九一四年の戦を惹起して千二百萬人の人をして死に至らしめた獨逸皇帝を、聖徒ヴィンセント、ド、ボーロに比する事は出来ない。兩者は共に生き人形でもなく、宿命論の奴隷でもない。

意志自由を禁ずる事はすべての責任、すべての道徳的評價を禁ずる事であり、善人と惡人とを平等にする事である。吾々の内部の確信はこれに反對する。かゝる場合、吾々は最も明瞭な觀念を棄てなければならぬ事となる。

各人の前には彼自身知らない運命が横つてゐて、多少そこに各人の自由意志が働いてゐても、事件は種々に起つて来る。そしてその偶發的事件その物がそれからの自由意志の原因となる事がある。人類の生活は多種多様の道を辿つて行はれる。これが原因となり、結果となるものである。

そこに理屈では推されない馬鹿と利口がある。——但し馬鹿の方が遙かに多い——特に統治者に於てこの二つが著しく顯はれてゐるのである。

吾々の前に自ら知らない運命があるとしても、各人は尙この運命を自ら創造する、吾々はその能力、遺傳、教育、判斷に従つて行動し、自ら相對的意志自由を有し、自ら決定をなし得る事を熟知し

てゐる。吾々は運命を作るものである。

どんなに腕いても、吾々の死すべき時は既に決つてゐる。何故ならば事件は相連続し、その中に吾々の氣まぐれ、弱點、不注意、誤謬をすべて包含し、吾々の周圍に來り去るすべての事を含んでゐるからである。人は生來その能力、心性に従つて行動する。正直な人は嘘をいふ様には造られてゐないし、大まかな人は貪慾になる事はないであらう。それにも拘らず各人の能力の制限を受けた行動が存在し、時にはその決心を定めるまでに數週或は數ヶ月の反省を必要とする場合がある。然るに吾々の行爲は相聯關して、豫め未來を知つてゐてもこの連鎖を變へる事は出来ない。

心理現象解剖學の大家ボザノがこの明かな矛盾を定義して、「精神——但し條件的自由の精神を包んだ肉體には自由な判斷もなく絶對的決斷もない」と書いてゐるのは合理的である様に思はれる。

諸君は尙大方これに反對して、若し事件が必然的に起らねばならないならば、事業に成功しようと努力する事も、争鬭に勝利を得ようと努める事も、病人のために醫者を求める事も、反對者と戦ふ事もすべて無意義となるであらうと言ふかもしれない。この反對は正しく吾々の日常の行動を證明するものである。諸君が如何に定命論を信じてゐようと、出来るだけ早く醫者を呼びに行くだらうし、侵略者に對して國を守るだらうし、火事があれば消防署に走り、仕事場の紙に火花が落ちればすぐに

その火を消すであらう。諸君は理性を持つて居り、常にこれを利用してゐる。この事は決して諸君が理性を缺いて居り、生き人形に過ぎないといふ事にはならない。

吾々の自由、選擇自由の力、自覺的決斷を有つてゐると云ふ事の最上の證據は、吾々が其中に詭辯を容さない親密的な、絶對的感情を有つてゐると云ふ事ではあるまいか。諸君は自分勝手な推量の出來ることを知つて居る。諸君の指を屈けやうと云ふ氣持の前に先入觀念が繼在して居る事は言ふ迄もない。此の氣持即ち意象こそ既に其れ自身に於て實在であり、精神的自由を有する吾々の單なる心から出て居るのである。

未來なるものは環境に依つて決定される。其處には人間の自由は勿論、不條理に斃された動物の復讐や、其他吾々の常に想ひ浮ばない様な特種な場合が夥しく生ずる。

人間の個性は人類の間に起る一切の事件中に積極的動機の一部をなすものである。

此の問題はシセロ、セイントオーガスチンや、ラブラスや、その他の人々に依て種々に解決を試みられてゐる。

宿命論と人間諸事の避け得られない連鎖とを混同しない様に、此處では最も明確な區別をしなければならぬ。例ひ其れが原因に對して必要な結果であらうとも、起つた事件を避け得られない事はな

い。或る人が群集の中で急いで行く人に、後を拳骨で一つ擲られたとする。併し彼は其を受けずに済んだかも知れない。何故かと云ふに、一方には其の目彼は家を出なかつたかも知れぬ。又は其方向に行かなかつたかも知れぬ。或は又彼を襲つた人が其場に居らなかつたかも知れなかつたからである。事は種々に違つて起つたかも知れない。そして其の結果は又違つて来るかも知れない。併し豫告的幻想は特に起るべき物を示すかも知れぬ。唯だこの場合、その幻像にも、それを見る者にも自由意志が缺けて居るだけである。吾々は事件の進行に協力して居る。茲に吾々自分丈の事に就いて言ふのは當らないかも知れないが、併し自分が一番良い判断者である事は確かだ。そこで自分丈の適確な例を用ひて見る。私は多年の間世界に天文学の知識を普及する事に努力して來た。そして私は或る程度迄それに成功した。科學界の知名な人士や、心ある人々の佛蘭西天文学會の創立と其發展に對して援助して呉れた。私の此の事業に就ての苦心、そして私が此の事業を個人的仕事ではないとした事は何人も私の心から抹消する譯には行かない。總ての關係者は私と同等に働いて居る。意志とは無益な言葉ではない。誰でも各々自身に關して居る事に對して同じ様な反省をする。吾々は活動する、そして未來は吾々の續次的動作から作られる。其は宿命ではない。寧ろ其の反對かも知れない。宿命論とは所謂寐て待て主義の説明だ。彼等は唯だ想像した事の何か、願はれて來るのを待つてゐるのだ。吾々はそれ

と反對だ。吾々は働く、吾々は事件の進行と共に其れと協力して行く。吾々は受動的ではない、全く能動的である。吾々は自ら未來の殿堂を作る。定命論と宿命論とを混じてはならない。後者は不活動を示し、前者は活動を表はす。

宿命論は東洋主義である。土耳其主義である。定命論は歐洲主義である。そこに二つの文明の間には底知れぬ深淵が横たはつて居るのだ。

未來を見ると云ふ事は唯だ將に起らんとする何かを見る事である。其は豫視でない。單に見る事である。天文学で吾々は彗星の軌道、例へば正理論的軌道、空間曲線——楕圓、拋物線、双曲線——を計算する。併し彗星が大きな恆星の附近を通つてその引力の作用を受ける事は有る。此障礙の爲めに其軌道の進行が變はる。そこで彗星を觀測するには其の位置と此の障礙を考量しなければ確かでない。

何んな影響でも、事實の上に何等かの結果を齎たらす。人間には例ひ或る獨立性を持つて居ても、惑星の障礙と同様にその進行に受ける影響を無視する譯にはゆかぬ。

故に人間の遭遇する種々の事件を豫知する事と、吾々の自由の感情とを一致される事は不可能である。

観測者が其の麓に廣大な平原の展開してゐる山の頂の近くに居たとする。彼は村に通ずる路を行く人を見る。彼は此の旅行者を或る用事で其の村に行くのだと推量する。彼が行人を見ると云ふのは個人的自由である。それを妨ぐるものはあるまい。

歩いて行く人の自由意志は観測者の見る事を妨げない。豫め事件を期待して見る事はその事件の進行に何の影響も與へない。吾々は又、山の上から二列車が轉轍の間違で互に双方から猛烈な勢で走つて來てゐるのを見たと思像する。災禍は刻々切迫して居る。そこに吾々の視覚、吾々の先見には最早何の意義もない。其を見てると云ふ事と事件とは全く無關係である。未來と云ふ事から其の事件を離して見ても、それは、過去から離れて物を見ると同様に、その決定的原因——此の中には人間の意志が働いてゐる事は勿論である——から生ずる影響を免れる事は出来ない。

諸君が小説を読む。其の話の残りを正確に豫想した事は無かつたか。そして作者の最も偉大なる技能は彼の空想的人物に眞實味を與へて、讀者をして其の話の残りを待たしむる程の興味を與へると云ふ所にあるではないか。例へば劇作家の巨頭アレキサンドル、ヂユーマは「皇后の頸飾」の次に「ジョセフ、バルサモ」を發表してゐる。此の作者の多くの著作表を見て行く中に「シャルニーの伯爵夫人」と云ふ表題がある。此の最後の筋を読まずに、又此の伯爵夫人は誰か、分らない中に、「皇后の

頸飾」の第十二章のマリー、アントアネットがアンドリー、ド、タバネーに向て、シャルニー氏の美しい性質の事を語つて居る。そしてアントアネットが殆んど色を失つて感動してゐる所を読む時、ド、タバネー嬢が深く愛してゐたシャルニーの夫人となると云ふ事を瞬間的に氣がついた事はなかつたか。諸君は未來を卜した事はなかつたか。

私の説に同意しない或人は、アレキサンドル、ヂユーマの性格は、自分の意志で何うにも動く傀儡であるから、私の比較は當らない。反て私の説の反對を證明する様なもので、何等價值のない説だと云ふ事や、結局男や女は全く自由人どころではない、結局吾々が神、運命又は機會と呼ぶ所の作者の手中にある人形に過ぎないものだと言ふかも知れない。

だが此の反對も當らない。アレキサンドル、ヂユーマは彼のロマンスを自分の考へ通りに作つて行く時、自分の欲した事、氣に入つた事、その註文、そして讀者に最も多く興味を與へると思はれるものを並べて行つた。そしてこの筋道を作る上に於て、最も働いてゐるものは彼の想像である。彼の性格は空想的にも、實在的にも——アンドリー、ド、タバネー、シャルニー伯爵夫人、サツフレンの執行官とその甥のシャルニー、マリー、アンドネーカーヂナル、ドローハン——劇作家としての非凡な才能の走る所に從て舞臺の上に色々な狀景を表はしてゐる。それはアレキサンドル、ヂユーマが大きい

な顔と粗末な假髪を持つてゐるのだ。故に彼の自ら欺く空想的事實が定命論に反するとて、眞面目に文句を言ひに來たエコールの心理學者を見て、彼は自分の想像は何うしても宿命的に書いて置かねば面白くないから遺憾ながら貴方の註文に應ずる事が出来ないと云つて心の底から笑ひ出す事であらう。

要するに、未來の事件に對する任意的幻想はそれが非常に多いのであるから、從て偶然一致の假説は何の價值もない事になる。こんな假説は絕對的に排斥しなければならぬ。充分に此の問題を研究した人は、それが下關の見地から來るものであると云ふ事に全く疑義を持たない。そして、これにはまだ實際の科學的解釋はされてゐない。併しこの場合にも意志の自由は失ふ事はない。

表現の形式は如何にあらうとも、又此の特別な問題を充分に研究して居らなかつた哲學者が其れを何の様に考へ様とも、未來を洞察することは全く人間の動作の自由や自由意志と何處までも矛盾して居ない。吾々は將に起らんとして居る物を見る。吾々は時と云ふものを棄ててしまふ。それは吾々の住む惑星の運動から生ずる果敢ない產物であつて、そのものは自らが存在するものではない。時の觀念は人間が棄てて了へばそれで済むのである。吾々は既に起つた事件を見る事が出来ると同様に、未來に起らんとする事件をも見る事が出来る。若しも、意志、氣紛れ、環境が外の異なつた何物かを賣

らしたならば、又、違つた外のものが見られる事であらう。從て未來の知識は過去の知識と同様に人間の自由に何の累をも及ぼさない。

絕對空間には時間は存在しない。若し地球が二倍早く廻轉するならば、一日は半分となるであらう。これを測るのは相對的であつて基本的でない。吾々人間の印象に、時間を構成する事件の連続と絕對とを混同してはならない。天文學は既に吾々に此の區別を示して居る。例へば今晚シリウスと、ヴェーガと、アルデバランを見る。諸君は現に見てゐる星は現在その位置にない星を見てゐるので、彼等にとつては本當に現在の位置ではない。シリウスは八年以前の狀態を、ヴェーガは二十五年以前の狀態を、アルデバランは三十二年以前の狀態を現在に於て吾々に示してゐるのである。吾々の現在は彼等の過去である。吾々は一九〇一年二月二十二日に、天の彼方に星の大爆發を見た。それは事實一五五一年頃に起つた事である。恆星は吾々に見えるときは既に其處に存在して居ないのである。同様に木星や土星の現在はこの地球の現在でない。

形而上學者は空間と時間とを一緒にして、其れに實際的に或る關係を持たせ、そして彼等に共通な性質を與へやうとして居る。其は抑も誤りである。空間は其れ自ら存在してゐる。其は例へば空であるとも依然として絕對的のものである。無窮なものである。恆久的のものである。何處迄も空は既に純

粹の空間であるからである。これと反對に時間はいずれ自身で存在してゐるものではない。其は星の運動と事物の連続に依りて作られたのである。若し地球が動かなければ、又星が運動をしなければ、時間と云ふものは生れて來ない。併し空間は存在する。世界の間の絕對空間には時間はない。

予は此の問題に就て現代の最も卓越した哲學者等と十五年間も論争して來た。そして予は彼等の多くが自由を犠牲にするより寧ろ未來を豫知する可能性を犠牲にするのを望んで居るのだと云ふ事が分つた。彼等はこの兩者の間に調和の存在し得る事を推察しなかつた。鬼も角、吾々は觀察の事實を否定したくともこれは否定出來ないのである。再び是れ等の事實に戻る。

一九一二年、獨逸の哲學者シュツペンハウエルの著「動物磁氣と魔術」の佛譯が發行された。原著は一八三六年にフランクフォルトで刊行されたもので、一八五一年には伯林で「靈と前兆的夢」に關する著書が刊行された。茲にその本の一節を紹介する。

「夢は時には重大な事件を告げる、併し時には考察者の注意に値しない程つまらない事をも告げる。私は自ら充分の經驗からそれを確かめた。私は此の經驗に就て語らうと思ふのであるが、それは例ひ全く偶然的であつても、極めて必要な事を示してゐるからである。

或る朝、私は非常に注意して最も重要な長い英語の手紙を書いて居た。第三頁の終迄書いたと

キ砂箱と間違ひてインキ壺を取り其れを紙の上に撒いてしまつた。インキは机から床の上に流れた。私がベルをならすと召使がやつて來てバケツに水を持つて來た。そして床を洗ひ始めた。彼女は洗ひながら「私は昨晚インキの汚點を拭き取るため此の床を擦すつて居た夢を見ました」と言つた。私は「それは嘘だ」と答へた。すると彼女は「本當で御座んす。私は一緒に寝る今一人の朋輩にもその話をしました」と言ふのである。

丁度其の時十七才になる今一人の女中が入つて來た。床を洗つてゐる朋輩を呼びに來たのである。私は自ら彼女の所に行つて、「昨晚あれは何の夢をみたか」と尋ねて見た。「知りません」と彼女は答へる。私は再び、「併しあれが起きた時お前に話した夢の事だよ」と云ふと、其時若い召使は思ひ出した様に、「お、さう、彼の方は此處で床のインキの汚點を洗つてゐる夢を見ました」と答へた。

これは私が其の絕對眞實を保證する事の出来る事實である。この種の夢の實際に在る事は最早疑ふ餘地はない。インキの粗相は全く私の意志に反して、私の手の過失から起つたものであるから、それは無意識に因るものである。故に何等注意に値する事ではない。けれども此の行爲は全く必然的に避け難い運命を決せられて居たのであつて、その結果は既に數時間前に他の自覺の中

に夢として存在して居たのである。』と。

私は此の話を私の説の實證としては採用しないで、姑く疑問の場合の部類に分け置く。(何故かと云ふに召使の取調べには時として兎角怪しい點が多い。又數人の召使が共謀して主人を騙して興がる様な事があるからである) 例ひシヨベンハウエルが著者としての立場からでなく、且つその事が彼の説の證明に何等關係のない、彼としては單純な事實その儘の提供であつたとしても矢張同一である。彼は二人の召使の眞實を確信して居ると言明した。彼の心には豫告的夢の實在に就ては何の疑を持つてなう。

併し彼は其の解釋に於て既に間違つてゐる。彼はインキ壺を倒した事は決して強ひられた結果ではない。其の事實は其が起つたから見られたのである。

この獨逸哲學者の召使の此の話から予は伯林の「超感覺的世界」(一九〇四年八月)中に載せてあつた他の女中の同様な幻覺を思ひ出した。それは慚うである。

『陪席判事のブーフベルゲル氏は、或る時偶然オーバーマイスに居た事がある。或る朝五時頃彼は夢を見た。其れはオルミツツの彼の家で、召使が火のついた衣物に水をかけられてる所の夢であつた。そして此の不幸な女の身體の色が白かつた事だけを見て眼が覺めた。』

ブーフベルゲル氏は間もなく家に歸つた。彼の妻は召使が火傷をして死んだと彼に告げた。それは彼が夢を見た日の而かも朝の十時に、彼女が假漆を温めて居ると其れに火が移り彼女の衣物に火がついた。室の周圍を駆け廻つてゐる彼女を辛ふじて捕へ、地に倒して水をかけた。それから病院に連れて行つたが、數日後、遂に死んでしまつたのであつた。

此の夢を見たのは、朝の五時頃である。そして其の事件が十時であつたと云ふのは儘かに注意すべき事である。これはシヨベンハウエルの場合と同じである。

此報告にはグラツツ、ルーフェルベルグの陪審判事ブーフベルゲル氏が署名してゐる。』

吾々はこの事實の正確を疑はない。けれども茲に不思議なのは此のパラドックスな證言である。即ち未だ存在しない、そして小さな連續せる原因の續きの結果である未來は、恰も其が既に實現されてあつた様に見られると云ふ事である。

それは單に豫告的夢ばかりではなく、今の所定義するのに六づか敷しい心靈の或る狀態に於ても未來を見る事が出来る。此の未來を正確に見ると云ふ事の中で、私の知つてゐる最も珍しい例の一つは心理學協會の私の學友グレイ博士の報告した觀察である。彼の著作は讀者の良く知つてゐる所であるが、此處に其の概紹介する。

「一八九四年六月二十七日午前九時頃、當時リヨンの醫學生であつたガレット博士は、彼の室で學友である今のアンネシーの醫師ヴァレー氏と一緒に働いて居つた。

當時グリー氏は非常に仕事が忙しかつた所へ博士の學位請求試験の準備に殆んど寸暇もなかつた様な有様であつた。

彼は政治方面には少しも興味を持つて居なかつたので、新聞紙も一寸目を通す丈であつた。唯だ數日前にほんの坐談的に而も偶然にその日行はるべき共和黨の黨首選舉に就て論じ合つた丈であつた。選舉會はヴェルサイユで當日の正午に始まつた。

仕事に全く氣を奪はれて居たガレットは突然ある思想が涌き出したので、不本意乍ら一時その仕事から心を轉ずるの止むなきに至つた。その時、思ひも寄らない言葉が忽然として腦の中に浮んで來た。餘りの不思議さに彼は其手帖に書かずに居られなかつた。そして其の文句は、

「カシミール、ブリール氏は四五一票で共和黨の黨首選舉された」と云ふのであつた。

私は再び繰り返して言ふが、これは會議の始まらない中に起つたのである。けれども、吾々はグリー博士の最も明かな記憶を有つてゐる其の文句は現在を示したもので、未來を表はしてないと云ふ事に氣がつかねばならぬ。

その時、グリー博士は氣がほんやりして來たので同僚のヴァレー氏に自分の書いた紙片を示した。

ヴァレーはそれを読んで肩をすくめた。そして彼の友が非常に興味を以てその豫感を信ずると主張してゐるのを見て、多少の不安を感じ乍ら少し冷静に氣を持つて仕事に掛らうではないかと彼に注意した程であつた。

晝食後グリーは大學の教室に出る爲めに出掛けた。其の途中彼の學友で今のハウト、サボアエのクルセイユで醫師をしてゐるブーフエ氏と、ソノンの藥劑師デボン氏に會つた。彼は二人にカシミール、ブリール氏は四百五十一票で選舉されたであらうと云つた。二人は笑つた。併し彼は自分の確信を確めるために何遍もその事を言ひ續けた。

教室から出て來た時四人は又出合つた。そして心氣をはらすために附近のカッファエの屋上に行つた。この時新聞賣子が黨首選舉の號外を持つて來た。彼は、

「カシミール、ブリール氏は四百五十一票で當選した」と叫んで居た。」

吾々はグリー氏の言ふ所を確信する事が出来る。而も彼は尙注意深く立派な證據即ち目撃者の署名した陳述書まで添へてある。

(一) リヨン病院の前助手ヴァレー醫師の口述書。

(二) ソノンの藥劑師デボーン氏の口述書。

(三) クルセーユの外科醫ブーフエ醫師の口述書。

カシミール、ブリール氏が二十八票の差で當選した事は全く意想外な事で、人々は寧ろプリソン氏かドウブイ氏のものであらうと豫期してゐたのであつた。

斯様な二三の簡單なる符合の例を見ても、最早推理的な疑惑の域を出て了ふ。そしてこれ等の例は互に其確率を増してゐるのである。若し澤山な例の中に、單に一致した一つの例だけが孤立してゐるものなら、吾々はそれを疑ふも可い。併し吾々が證明して來た様にこの種の例は幾らでもある。例ひ其等が今日の科學で説明出來ない様に見えて居つても吾々の心にこれ等の豫知的事實が實在するものであると云ふ絶對的確實性を明かに示して居るのである。

それは又、一方から、無意識的なある媒介物がその起るべき出來事を示したのであるとも見られる。併しカシミール、ブリールの選舉は絶對に避け得られない事ではなかつた。即ち九百四十五人の選舉人各自は、シヨツベンハウエルが彼のインキを倒した時と同様に、ゲリーをして感應せしめたのであつた。各人は自分の判斷に従て行動した。此の例は確かに宿命論に對抗すべき代表的な證據の一

つである。

更に吾々の自由な研究を續けやう。

心理科學年鑑の主幹セサール、ド、ヴァ氏は一九〇一年に次の様な異常な豫知の例を話して呉れた。

『ザインセント、サツサロリは人口六千許りあるサルテアノと云ふ市に住むために出掛けた。それは一八六五年の第一日であつた。』

此の附近に三十四人の演奏者から成つて可成りの音樂團があつた。然るに従來その指導者であつたジョセフ、フロンヂニ氏は政治上のある關係から田舎へ行かなければならない事情が起つたので、彼はサツサロリに自分の後任指導者となつて貰ひたいと相談した。

サツサロリ氏はそれを受諾した。彼は直ちに音樂團の人々が練習してゐる室に行つた。其室は或る家の三階で、カノン、ドム、バツチエリニ氏の所有して居る建物であつた。練習が終んでから皆の居る前で彼は「今に此の部屋は勿論建物の全部と一緒に、地下室から屋根まで破壊されて仕舞ふであらう。そして自分を始め此所に居る人々は皆その下敷になつて了ふ様に思はれてならぬ」とフロンヂニ氏に言つた。

これを聞いた彼等は新しい指導者が冗談を言つてゐるのか、さなければ氣が狂つて居るのかと訝り乍ら互に顔を見合せてゐた。併しサツサロリ氏は平氣で其の災禍の起る日や、時間までも眞面目に告げた。

人々は不幸な人は最早氣が狂つて居るものとして了つた。彼等は笑ひ乍ら歸つて行つた。

それは馬鹿氣た話として自然にその附近に擴まつて、近所の人々は大いに嗤つた。

サツサロリ氏は飽まで自分の豫言を固執してゐるので、フロンチニ氏は彼がその爲めに世間から氣狂者扱にされるのを惧れて、何とかして彼を理性に戻らせやうと色々盡力をして見た。そこで、彼はカノン、ジョセフ、バツフェリニ氏の同意を得て、建築家に頼んで問題の建物を屋根から土臺までも綿密に調べて貰つた。その結果、毫も崩壊するやうな惧れはない事が分つた。此の證明に力を得た彼は早速サツサロリ氏にその事を告げて彼の愚な豫言を撤回するやうに注告した。フロンチニ氏の骨折も終に駄目であつた。サツサロリ氏は餘命四日に迫つた今日に於て遺憾なく君の希望に副ふ譯には行かないと答へた。

茲に至つてフロンチニ氏は先生の健康を疑はずには居られなくなつて來た。終には彼の爲めに故らに亂暴な事をされてはと云ふ危惧を感じたので、出来る限り彼を見張りをする様になつた。

カフェーでも、銘々の家でも、人々は只此の狂者の豫言の噂で持ち切つた。そして其の界限の笑話となつた。

愈々大事件の日が到來した。其の日は恰度練習日であつたので、樂手達は夕方から例もの通り其の室に集つて指導者の來るのを待つて居る間にも、彼の噂で笑ひ乍ら時間を過して居た。間もなくサツサロリ氏が來た。併し彼は災難の時間が刻々近附いて來ると言つて非常に興奮してゐた。遂に其の晩の仕事に就ての話を避けて樂手達を強いて室から連れ出して了つた。

彼等は己むなく彼の言ふ通りに従つた。そして階段を降りて行く時、眞先に居たサツサロリ氏は「靜かに、靜かに歩け、吾々全體の重みで早く崩れるといけない。」と何遍も繰り返してゐた。

予はその時の此等三十四人がサツサロリ氏に對する輕侮や、嘲弄の態度を想像する事が出来る。彼等は自分等も愚な狂言の中に這入つて狂者の眞似をしてゐるのだと思ひつゝ、階段を降りて行つたに違ひない。斯くして彼等一同は街路に出た。この時早くこの時遅く、サツサロリ氏の豫言した其時刻に其の家が上から下迄全部崩壊してしまつた。彼の豫言の實現を眼の當り見せられた田舎の人々の驚異、感情、そして敬意、吾人は茲に拙い形容を用ゐる必要はなからう。

この事件の報告はジョセフ、フロンチニ氏の書いた物である。彼の父は市會の議長で事件の翌日一番始めにサツサロリ氏に敬意を表した人であつた。又、この報告に三通の口述書が附いてあつた。それはサツサロリ氏の住んで居た家の家族からのと、劇場の番人からのと、そして劇場の近くに住んでゐる人からので、皆其の事件を保證して居るものであつた。」

吾々は尙ほ斯かる絶対に確實な事件の存在すら疑ふ事が出来やうか。これすら不信で固まつてる人に聖痕を示した時の様に信じ得ないとしたら、彼等は眼があつても見えない。耳があつても聞えない」と云ふ事も承認しない譯には行かない。何事も否定する。常に否定する。否定は竟に何を證明するであらうか。

然り、吾々は未だ満足しないとする。吾々の秤りにはまだ證據の重みが足りないとする。茲に今一つの重りがある。

茲に極めて正確に未來を見たと言ふ驚異すべき實例がアルフォンセ、テスト博士の「催眠術一般」の中に紹介されてある。これは催眠術的透視の中で最も奇妙な、そして最も特長のあるものの一つである。

「五月二十八日の金曜日に私はホータンス、M夫人に催眠術を施した。或る日彼女は驚くべき透

視力を發揮した。この時、彼女と彼女の夫と私と三人丈であつた。彼女は恰も自分一身の未來が悉く彼女に先入して居た様に思はれた。そして彼女の告げた豫期されてないものの中でも吾々を驚かしたのは次の豫言であつた。

「私は妊娠してから十五日になります。併し子供は満足に産れますまい、それは次の火曜日即ち同月十二日には私は或る物に驚かされて倒れる。それが因で私は流産するでせう」。

私は目撃した總ての事實の中で此の豫言程深く私に感動を與へたものはなかつた事を特に告白する。

「何に驚かされるのですか。」私は興味を以て尋ねた。

「私には分りません。」と彼女は答へた。

「併し、其は何の方向から來るのですか。貴女は何處へ倒れるのですか。」

「それはお答出來ません。私は何も知りません。」

「それを避ける工夫はありませんか。」

「ありません。」

「だが、私共が貴女を注意してゐても――」

「それは關係しません。」

「その爲めに貴方は御病氣になりませんか。」

「えい、三日の間。」

「貴女は自身に起る事を實際正確にお分りですか？」

「火曜日の三時半に私は何かに驚かされて八分間も氣絶するでせう。それから後脊中に甚い痛みを感じてその爲めに其の日の夜中まで苦むでせう。水曜日の朝になると出血し始めます。随分澤山出ませうが、私は其のため死ぬ様な事はないから御心配は要りません。木曜の朝には癒くなつて終日床を離れる事が出来る位になりますが、夕方五時半頃から又新しい出血があつて、一寸人事不省になります。そして其の晩には恢復しますが金曜日の夜には精神が錯亂するでせう。」

ホータンス夫人は其れ以上言はなかつた。彼女の言つた事が一々適中しないものとしても、私共は最早これ以上追求し得ない程彼女の豫言に深く感動せしめられたのである。けれども非常に心配してゐた彼女の夫は、更に彼女に何の位精神錯亂が續くのかと尋ねた。

彼女は「三日間」と靜かに答へた。そして又、「心配しないで下さい。私は何時迄も氣が狂つて

もゐません、又、死にもしません。只私が苦しむ丈です」と優しく附け加へた。

夫人は覺めた。例もの通り催眠中の事は記憶してゐなかつた。私は特に彼女の言つた事を彼の妻に秘密にして置く様にと蔭で夫に注意した。それは例へ空想的な事であつても彼女がそれを必くと非常に落膽する事を惧れたのと、一つは科學上の興味から言つても彼女に知らせない事が必要であると思つたからである。H氏は總ての約束を守る事を誓つた。そこで私は豫言事項を全部ノートに書き取り、翌日アメデー、ラトール博士の所へ行つて此の事を話した。

運命の火曜日は來た。私の氣に懸るのは唯だH夫人の容子だけであつた。私が彼等の家に着いた時彼女は夫と一緒に晝食をして居た。そして上氣嫌であつた。

私は這入つて行くと、「若しお邪魔でなければ夕方迄遊ばして下さい」と言つた。するとホータンス夫人は、

「入らつしやい！ 何うぞ御悠づくり、唯だあんまり催眠術の話ばかりするのはご免ですよ」と答へた。それで、私は、

「いや、もうその話はしません。唯だ私の爲めにはんの十分間だけ眠つて頂けば可いのです」と言つた。

彼女はそれに同意した。食後少し経ってから私は彼女を眠らせた。

「如何ですか夫人！」

「結構です。併し其れは長くは続きません。」

「其れはどうしたのですか。」

彼女は又金曜の事を繰り返へした。「三時と四時との間に私は或る物に驚かされて倒れます。そして多量の出血がありませう。」

「何が貴女を驚かすのですか。」

「存じません。」

「併し、調べて見て下さい。」

「何も分りません。」

「その災難を避ける手段はないものですか。」

「ありません。」

「夫人！ 今晚こそ貴女の言ふ事が違つて来ますよ！」

「先生！ 今晚は私が大變悪くなるので、それで心配して下さいませう。」

私は其れに何も答へなかつた。私は少しの間待つて居た。

それから數分経つと彼女は覺めた。何も憶えてゐなかつた。夢中の悲しい幻像に依つて惱まされた彼女は再び元の晴れやかな顔に回つた。彼女は眠る前と同様に心置なく話し合つたり冗談を言つたりして居た。殊に彼女の態度も、言葉も極めて自然的でその得意な、そして愉快的警句さへ洩してゐた。この伴りない常態を見てゐる私は、言葉に表はせぬ異様な氣持に捕へられてゐた。時々自分の信仰を揺がす様な憶測や假設の中に我知らず吸ひ込まれて居たのであつた。私は總てを疑つた。更に自分自身を疑つた。

私は一秒でも彼女の所から去らない様にして、一々彼女の微細な行動までも注意してゐた。そして街道や、附近の家に起つた或る事件が動機をなして彼女の豫言を現實する様な事のあるのを恐れたので、窓をすつかり閉め切つた。その時誰かベルを鳴らしたので私共二人の一人が玄關に出て行つた丈であつた。

三時半が少し過ぎた頃であつた。ホータンス夫人は自分が何かの注意を受けてゐる事に漸く氣が付いてびつくりした様子であつた。けれどもまだ私共の秘密を看破るまでにはいかなかつた。この時彼女は私が坐らせてゐた椅子から立ち上りながら、

「あなた方が何か大層御心配の容子ですが暫時の間私を去らして下さい。」と言ひ出した。私は最早隠す事の出来ない不安の態度で、

「何處へ行らつしやるのです？」と叫んだ。

「一體、何うしたといふんです、あなた方は私が自殺でもすると思つていらつしやるのですか？」と反問して來た。

「いいえ、さうじゃありません」

「そんなら何んです」

「別に何んにもないのですが、唯だ貴女の健康が氣づかはれるからです。」

彼女は笑ひ乍ら、「そんなら尙更出掛けた方が私の健康の爲めにいいのです」と答へた。

私は仕方なく承知した。

強いて彼女を引止める事も出来ないではなかつたが、主人は彼女の行先を見たい様子であつたから、私はその上の話は止めた。主人は彼の妻に、

「私はお前に何處迄も附いて居つてもよいか。」と尋ねた。

「何です？ そんなら賭でもするんですか？」

「さうだ。私共の賭なんだ お前は幾ら私を揺かうとしても、そりや駄目だ。私は確かに勝つよ。」と夫は胡魔化した。

ホータンス夫人はほんやりして私共の顔を等分に見てゐた。

聽て彼女は夫の差し出した手を取て笑聲を残して出て行つた。

私も亦笑つた。それでも私は何となく結定的瞬間がやつて來たと云ふ様な豫感らしいものを感じた。私は再び客間に這入つて來るだらうとは考へなかつた。私は茫然と立つて居た。

直ぐ貫く様な叫聲がして身體が倒れる音が聞えた。私は急いで階段を降りて行つた。友は浴室の戸の所で氣絶して居る妻を抱いて居た。

叫んだのは事實彼女であつた。そして響いたのは全く彼女の倒れる音であつた。彼女が室に這入らうとして夫の手から離れた瞬間、突然鼠が出て來た——彼等は二十年間も住んでゐるが、其處にはまだ一疋の鼠も居なかつたと言つて居る——彼女は甚く驚いて夫に縋りつく、間もなく倒れてしまつたのである。

其の後の事は彼女の豫言した通りであつた。斯かる明確な事實が存在してゐても、尙未來の豫見の可能性に制限を附けたり、人生に定義を

與へたりする事を敢てし得るであらうか。」

吾々は著者の誠實を疑ふ事は出来ない。彼等は自ら此の知覺を失つて千里眼に依つて非常に深い印象を與へられた。此の事實に誤りがないとすると、吾々亦この現象から彼と同様の印象を受けない譯には行かない。繰り返して言ふ事だが、總てを否定する事は正に人類の全歴史をも否定する事になるであらう。

吾人が今研究せんとする多數の報告、最もその種類に富んでゐる材料の中から、特に顯著なこの實例を茲に引用したのは最早單なる偶然と云ふ平凡な解釋を下す事の不可能な現象であるからである。或人は多くの場合に於て發言者の病的幻想は總て潛在意識の自働暗示から作られるのである。彼女の見た未來も亦要するに自身で作つたものである。探るに足らぬ假設である。この假設は前項に掲げた劇場の破壊や其他の例と全く正反對なるものであると思ふかも知れない。

最も驚異すべき出來事を豫知したと云ふ確證を吾々に與へる人々の説明を、充分な注意の下に聽取する事は、吾々として擇るべき正當な道である。吾々は此處にも多少平凡ではあるが此種類に屬するもので、その方法から考へても疑ひの餘地のない事實がある。それは私の友ロチャス大佐の報告に依る有名な軍醫ラレー男爵に起つた話であるが、或る晩彼は富嶺の四つの數の夢を見た。翌朝彼は訪問で

忙しかつたので、彼の妻に其の番號を賭けて見る事を頼んで出て行つた。けれども彼の夫人は、すっかりそれを忘れてゐた。事實彼の告げた番號は正しく出たのである。彼の失望は何うであつたらう。此の符號は殊更ら偶然で押し付けてしまふ事は出来ない、何故かと言ふと、彼は二五五五・一八九と云ふ多數の中から單に擇んだのであるからである。四つ取つても恐らく同一であらう。今日吾々は未來を見る事が出来る事を知つて居る。

此の事件は前と同様興味のあるものである。ラレー男爵は實直な學者であると同時に卓越した人である、彼の證言は名譽の表徴である。

茲に予が讀者の公平な判斷に懇へんが爲めに提出した幾多の實例は、何れも皆それ／＼異つた動機を示してゐる。其れは單に前兆的夢や、睡遊の状態に於ける占トや、觀掌術や又はカードとする様な豫言の種類許りではなく、凡ゆる物に亘つてゐる問題である。即ち腦神經活動の凡ゆる形式が表現されてゐるのであると同一である。故に其處に何等かの暗示的事實——力があつたと云ふ事を否定する事は不可能である。

吾々の研究を続けやう。

予の知つて居る死の豫告的夢の中でも、最も悲劇的な例はド、セルミン博士自身の子供の死に關す

る事も確かにその一つである。左に博士自らの説明を紹介する。

私の長男が四回目の年を迎へた許りの事であつた。私は何う云ふものか此の子供にだけは他の子供には全く感じなかつた一種特別な愛着を有つてゐたのであつた。彼の一瞥、彼の微笑、私には天使のやうな子供と思はれた。私は此の子供が聴いて聰明な青年になるであらうと期待してゐた。兎に角現在に於ても彼は私の喜び、私の慰安であつた。家に歸つてから彼と楽しい話をする事を考へた時、私は總ての勞苦を忘れた。

或る晩私は火の燃えてゐるストーブの前で其の子供を抱いて居た夢を見た。何うした機みか子供を燃えてる焔の中に滑り落した。その時私は火中から彼を救ひ出さずに慌しくストーブの戸を閉めた。

それは、火の中から子供を引き出して見た所で、頗る重い火傷であるから二、三日非常な苦しみをした後で死ぬに極まつてゐる。今ストーブを閉めると恐らく一分も経たずに死ぬであらう。何の道死ぬのなら長く苦しまない方が可いと慥う考へたのである。

何んと思ふ議な、愚かな、そして殘酷な考へ方であつたら。うけれども私の夢ではこれが賢明な方法としてその通り行つたのである。

私がストーブの二つの戸を閉めた時、中では生きながら焼かれつゝ動き廻つてゐる音を聞いた。

私は言つた。「おゝ神よ、彼を早く死なしめよ。私は彼の苦しみを聞くに堪えません」と。

私は驚いて目が醒めた。私の顔は冷汗でびつしよになつてゐた。私の心臓は波打つてゐた。私は先づ床の上に坐つて言つた。「其れが只の夢であつた事を神に謝します」と。

それから私は子供の部屋に馳せて行つた。彼は今釋かに寢て居るのである。彼の呼吸は正しかつた。彼の脈も普通であつた。彼の皮膚は例もの様に若々しかつた。けれども私の亢奮は容易に鎮める事は出来なかつた。「馬鹿な話だ、其れは只の夢だ、子供はこの通り何の變りはないのだ」と自分自身に告げてゐる駄目であつた。——「寢室に歸れ、そして早く寢ろ」と。それは私の理性の囁きであつた。けれども私は何處からとなく湧いて来る不安を抑へる事が出来ずに、悪い豫感を斥ける事が出来ずに寢床に歸つたのであつた。朝起きると、私はすぐ子供の部屋に行つた。彼と話した。彼は例もの様に快活であつた。彼の健康には微塵の異狀も表はれてなかつた。

「行つて働け。子供の事は案するな。お前の夢は愚の極だ。自分の子供をストーブの中に投げ入れる馬鹿はない。子供の這入つてゐるストーブの戸を早く死ぬ様にと閉める様な愚な者はゐない筈だ」……それは良心の罵りであつた。

私を責めたり、私を悩ましたりする外に何も言はない私の潜在意識が實際眞理の所有者であり、將に起らうとする事を知つて居たとは如何にして私は推量し得たであらうか。

朝になつて子供は覺めて平常の通り快活に嬉々として遊んでゐた。子供は朝飯を澤山食べた。私は安心して出掛けた。

私は晝頃家に歸つて來た。子供は長椅子の上に横になつて、うとうととしてゐた。彼の脈は早かつた。皮膚は焼ける様に熱かつた。彼の呼吸は迫つてゐた。私は何とも知らぬ心騒ぎがした。妻もそれと氣が付いて心配して尋ねた。併し私は強ひて自分を抑へて私の秘密の警告を隠さうと務めた。私は注意して子供の呼吸をじつと聞いた。私はそれが段々兩方の肺に達してゐる氣管支炎である事を直覺した。肺の下の方に微かな摩擦の音さへ聞えた。

私は思はず「こりや、重態だ、大變だ、子供は屹度死ぬ」と口を滑らした。恰度其時私等の懇意な醫者が馬に乗つて通り掛つた。妻は窓に飛んで行つて彼を呼んだ。

彼が這入つて來るや否や彼女は「子供が悪いんです、夫は死ぬと云つてます」と言つた。

このW醫師はその節大層評判の良い如才のない話上手な人であつたが、彼は餘り若い醫師には好意を持つてゐなかつた。

彼は子供を診て、笑ひ乍ら「何時からお惡かつたのですか。」と質ねた。

「殆んど一時間許り前からで、今朝は何ともなかつたです。」と妻は答へた。そこで彼は私を顧みて、

「この子供が助からぬと言はれるんですか？ 御主人！ 若い方にも困るな……」と言つた。續いて彼は「貴方はこんな事でお母さんを驚かしちゃいけませんよ。」

「此の子はやつと一時間許り前から惡くなつた丈だ。兎に角貴方の見立ては濟んだが間違つてゐる」と揶揄してから、私の妻に向つて、

「何んでもないから只靜かにして置きなさい。お子さんを床に入れなさい。何か熱い物を飲んで、よく溫めてやりなさい。そして汗を出した方がよい。私は晩迄ずうつと此處に居ります。」と言つた。

成る程自分の今の行爲は有名な醫者の眼には餘りに仰々しく見えたであらう。けれども、私は夢の中に得た確信に基いてやつた事だ何うしても言ふ譯には行かなかつた。彼は確かに私を馬鹿だと思つたに相違ない。

私は彼の説明に對して何の答もせず唯だ頭を下げた。併し彼が歸へらうとした時、私は「ど

うぞ、屹度今晚来て頂きたいのです。」と頼んだ。

私の更まつた頼みの聲が彼の胸に何う響いたものか彼は寸時立ち止つて凝つと見てゐたが、彼は再び子供の方に引返して復た診察し始めた。今度は初めよりもずつと注意して診た。

疑もなく彼は、「此の處に居る父は醫者である。彼はその子の状態を非常に心配して居る。彼の診方は尋常でない。或は自分の發見し得なかつた何かの徴候を彼が見つけたのではなからうか」と思つたのである。

彼は診察を終えてから、兩方の肺の所々に異常な音の聞えるのは本當だ。貴方は重い氣管支炎肺炎が現はれるものと信じてゐられる様だが、併し私共の考へでは軽い氣管支炎肺炎の徴候のある事は事實だが、それも二三日もしたら消えるでせう。假りにそれが氣管支炎肺炎の初期であつたからとて何も病人が助からぬと云ふ理屈がありますまい。まあ、氣を落ちつけて見ておやりなさい。では私は歸ります。」

然るに子供の容子は段々悪くなるばかりであつた。四日目には息が結つてもう絶望に陥つた。

子供の苦しむ臨終を豫想した時、私は夢の中に感じたと同様な煩悶を感じた。私は再び、「神よ彼を早く死に導き給へ。この上彼の苦しみが續くやうなら私は發狂してしまふ」と心の中で叫

んだ。

吾が子のジョージの死を豫言したこの夢を見てからは、私の心は睡つてゐる間に或る未來の事件を豫知する力を得ると云ふ確信を取り去る事は出来なくなつた。

けれども死の豫告が何う云ふ動機から、そして何が故に表はれたのか。何故私はストーブの中に子供を落したのか。何故此の不思議な夢を見たのか。子供が早く死ぬ様に戸を閉めると云ふ考へは何處から來たのか。何れにしても之等の動作は私の感じた恐怖と一致しないのである。

私は屢々これに就いて考へた。茲に私の考へた最も適當と思はれる註釋を加へて見やう。

私は其の晩更く床に這入つた。私は火の前の肘掛椅子に身を伸して本を讀んで居た。私は時々其の火を掻き混ぜた。私の神経には焼けて居る石炭と、其の一つの戸が開いて他の一つが閉ぢてあるストーブが印象されてゐた。それで私は其の中で子供の苦しんでゐるストーブの幻影——彼の苦痛を止めやうとして戸を閉めた燃えてゐるストーブの幻想は腦の刺戟から來たものと思はれる。

此の前兆的夢は明かに吾々の二重智力を示す。吾々は特に夢が何かの凶事を豫告した時、其の夢を信ずる事を好まない。然も此の様な場合に理性は潜在意識の深刻に苦惱してゐる感情を抑へ

る事をせずに寧ろそれを避けてゐるものである。」

報告者は彼の自覺的自我と潜在意識の自我との間の反目に就いて屢々考慮したと附け加へてゐる。彼は夢が必ず實現するものと確信してゐた。然し一たび避けた理性は恰も大洋に投げ入れられた人が破船の浮いてる一片にしがみ附く様に果敢ない希望にしがみ附く。

吾々の秘密の直感には相當の理由を持つて居る。吾々は其れ等の原因を確かめもせず一概に輕視するのは間違つてゐる。豫感には時に忘れられてゐた夢である事がある。

それ等の現象が如何に解釋されやうとも既に觀察されて來た事實は打ち消されずに残つてゐる。この子供の父は知らない間に子供の生理的狀態に就てのある印象を受け、豫め彼の避けられない死を信じて居たのである。即ち人間の心靈に豫感の力のある事を事實の上に示して居るのである。眞の心理的世界の存在を裏書する顯著な證據である。單に眼に見える生きてる有機體のみが心身の全部でないと云ふ結果の暗示である。然も吾々の中には斯かる明白な事實さへ未だに承認する事の出来ない人々が存在してゐるのである。

嫌忌すべき悲劇的な事實——彼が研究室に於ける立派な仕事を果たし、そして大學得業の試験に及第する其の日に自動車に轢き殺された彼の息子の死を、六時間も前に夢に正確に見たと云ふ事實を、

私の最も古い友人の一人から長い手紙に書いて知らして寄越したのである。此の夢は確かに事件の詳細、死體を運んで行く有様、負傷の狀態から家族の悲嘆の場面まで恰も寫眞——寧ろ活動寫眞に類はれたやうに明確に彼に示したものである。(第二二八信)

煩悶して居る家族の切なる要求に應じて私は唯だ豫感の事實だけを紹介して彼等の名前やその他の事を秘する事にしたのである。併し私は此の活きた劇曲から——單にこの事實だけからでも——所謂符合一致と云ふ様な曖昧な解釋を全部除去してもよいと思ふ。そして未來は時に最も正確に透視されるものであると云ふ事を言明せねばならぬ。

賢明な讀者はこれ等の事實を妄りに否定する事は唯だそれを否定する人の無智と頑迷を證するものに過ぎないと云ふ私の主張に同意される事を確信する。

茲にも前述の現象に遡らない豫告的幻影に就て斯道の熱心な觀察者から頗々私に知らして呉れた報告がある。

『これは半覺醒の場合に於ける豫告の一種であります。これも貴下の重要な御研究の一助となるものと思ひますから御報告申上ます。』

極く最近の事です。私の家の應接間で今研究されて居られる心靈現象の實驗に就ての話が出た

時、私の親戚の一夫人が次の話をして呉れました。

或る時私がバルコニーの外に凭り掛つてゐた時、急に私は深い悲しみの中を葬式に附いて街を歩いて居る幻影を見ました。此の強い印象から私はその日、服屋に行つて衣服の注文を取り消したのです。それは何かしら怖ろしい不幸が私に湧きかゝつてゐるのだと云ふ事が心に浮かんじかたです。果して四日の後、四つになる私の男の子が階段の頂上から墜ちて即死しました。

これは私が自分の耳で、未だ痛ましい印象の残つてゐる本人自身の口から聞いた事ですから疑問や、間違と云ふ様な問題は毛頭ないのです。

グレノブル歩兵十四聯隊中尉

ビー、ドレーバー

此れは外觀は屢々媒介物に依る交霊現象の様に見える事がある。即ち此の心靈は正確に未來を、就中問題の人物の死を見たのである。予の同僚であり友人であつた故ウィリアム、ステツド氏は「評論の評論」の主筆で、あのタイタニック號沈没の際溺死したのであるが、或る日彼は「亡霊ジュリヤ」から極めて不思議な一つの豫言を受けたと言つて次の様に記してゐる。

「數年前の事、私は實に才智の勝れた、體の何つちかと言へば餘り健康の方でない而も氣不同な性格の女を傭ふて居た事がある。その後彼女の客子がひどく變になつたので一月には彼女を解傭

しやうと考へてゐた位であつた。その頃「ジュリア」は私の手でEMさんをもう少し我慢して置いて呉れ、彼女も年の暮迄には私達の所に來て一緒にゐるだらうから」と書かせた。

私は自分乍ら吃驚した。それでも彼女の死を思はせる様な事は少しもなかつたから、其の事は何にも告げないで、私は忠告通りに彼女を使つてゐた。私の記憶にして間違ひがなかつたら、此の知らせがあつたのは一月十五日か十六日であつた。二月、三月、四月、五月、六月と其の事は又繰り返へされた。「EMさんは年の内に亡くなる事を覺えて居て貰ひたい。」と。七月に彼女は一寸した不注意から小さな釘を嚥下して了つた。釘は體内に宿つて中々の重態になつた。二人の醫者も匙を投げた。暫くして「ジュリア」はまた私の手で前と同じ様な事を書いた。それで私は「あなたが彼女の死を豫言したのは慥かな事なんでせう」と尋ねると「ジュリア」は「いや、此の病氣は全快するだらう、併し、夫れでも彼女は年の暮迄は生きてゐまい」と答へた。これには私も全く驚いた。間違ひなくEMは直ぐ恢復した。醫者達は皆驚いた程であつた。彼女は間もなく平常の仕事にかゝれる様になつた。八月、九月、十月、十一月と段々近づいて来る。而も例も事は毎月新たに繰り返された。十二月になつて彼女は寒胃に罹つた。「此れだらう？」と私は「ジュリア」に尋ねて見た。すると、「彼女は當り前の死に方では死なない。併し年の暮れぬ前に私達の

所に來るだらう」と答へただけであつた。私は驚かされた。併し何うする事も出来ないと言ふ事を考へてゐた。年は明けた。彼女は未だ生きて居た。「ジュリア」は答へた「日數を少し違へた。併し私の言つた事は本當の事だ」と。一月十日頃「ジュリア」は私に書いた「E M」に明日會つて告別して來い萬端の準備をせよ。もう地上では再び彼女に會へまい」と。

私は彼女を見に行つた。彼女は熱があつて悪い咳をして居た。今、病院に運ばれ様とする所であつた。二日後、彼女は氣が狂つて五階から身を投げて死んだと電報で知らして來た。日數は最初に告げられた十二ヶ月より數日しか過ぎて居なかつた。此の通信者の筆蹟と私の二人の書記の連署によつて此の事の根據ある事實なる事を證明する事も出来る。』

實際「亡靈」は前以て死を豫知し、而かもその死が變死である事も知つて居た様に思はれる。けれども此の豫言は果して一つの「亡靈」の所異に歸せらる可きものであらうか。此れに就てはまた證明されてゐない。ステツド氏をよく知つてゐる自分には、たとひ自身自身の身の安全に關してそれを應用し得なかつたにしても、彼の有する稀な心靈能力を認める事が出来る。確かに此の豫告は最も著しい部類に屬する。

ステツド氏の記述中の此の「ジュリア」なる物は一體何であるのか、心靈？ 潜在意識？ 抑も

亦特種の種類作用であつたか、吾等にはそれが分らない。併し兎に角未來を見る者は腦髓物質ではない。

斯の如く明確なる鑑識を以て考案され、豊富に引證された彼の著作「透視力と直覺(ト知)」なる本の中に引用されてある次ぎの自己感覺の實例はユウゼーヌ、オステイ博士が署名し保證して居るものである。

「透視力を持つて居て、而も自動的に文字を書くD夫人は、或る時代に於て彼女の手が獨りでに動いて、未だ嘗て聞いた事もない、又、何の關係もあり相にも思はれない「R何々」と言ふ言葉を書き記したので自ら吃驚した。そして數ヶ月の間は仕事の眞最中手を卓子の上に置かうとしても、何か文字を書かうとしても、先の同じ言葉が自づと書き記された。併しこれも自分の手の癖だらう位に考へて餘り注意を拂はずに居た。

或る夕、彼女の夫は、オラン地方の小さな田舎の「R何々」に遽かに技師として行く契約をして來たのだと語つた。

それから間もなく再び彼女の手が書き出したのは「六月」と言ふ文字であつた。D夫人は自動的に書かれる此の日附の字に何んな意味があるのかその解釋に苦心して見た。何遍も只「六月」

と出るだけであつた。その六月は來た。D夫人は此の月夫を亡くした。それから直ぐ彼女の手は執拗くも他の日附即ち「三月」と云ふ文字を書き出した。前の文字が意外にも夫の死別を豫示された悲痛の印象に深く惱める時、又してもこの忌むべき同じ様な文字を示された哀れな夫人の驚愕と悲嘆は如何にあつたらう。それでも彼女は何か眼に見えぬ靈の奴隸となつて、手が獨りでに書いたのだと信じたので、或る隠くれた神秘的な實在に向つて切ない訴をなし、この怖ろしい運命の手から解放して下さる様にと祈つた。併し彼女の願は結局斥けられた。彼女の手は矢張り「三月」の字を記して答ふるのみであつた。

怖しい運命の決する三月は到來した。此の月にはD夫人は娘と母を亡くした。』

此の神秘的な物語りは前述の物語と頗る似寄てつる。一々茲に紹介する事は出来ないが、此の種の事件は未だ／＼外に澤山ある。若し此の中の幾分を説明する事が出来れば同様に他も悉く解明されるであらうか、潜在意識であらうか、精神力であらうか、外界にある「靈」の力であらうか、抑も亦運命か、何れにしても吾々現在の無智はこれ等に適用すべき語を有たない。

此處にモルビハンの若い學生から送つて來た不思議な記事がある。

「私は茲に私の家に起りました豫言的な事實を御通知申し上げます。

私の祖父のチュフィルホル少佐は一八六二年アラン、カルテツフ氏宅で貴方を知つた人ですが、彼は一八九六年にはヴァンヌの近くに私の母と一緒に住んでゐました。

或る夕、祖父は獨り城の石壇を下りて母の居る小屋の方へ行かうとする時、突然、「家に一人死人が出来る」と云ふ聲が聞えて來ました。祖父は吃驚して考へました。「俺だ、俺が一番年寄りだ」と。すると、今度は「いや違ふアドルフ、ブラーヌ」だと云ふ聲がしたので。祖父が母の小屋に行つた時に母から「何所か御加減でも悪いのですか？」と尋ねられました。祖父は否と答へて、今の事を母に話して聞かせました。そして直ぐ私の叔父に當る當時ニイスで英語の先生をしてゐたアドルフ、ブラーヌの安否を問ひ合はしてやりました。間もなく別段變つた事がないと云ふ返事が來たので二人は少々安心しました。

二ヶ月後、叔父は大學教授の試験に合格しました。随分困難な試験であつた相です。然るに、試験官から「ブラーヌ君試験は通りましたよ、お目出度う」と言はれた瞬間に、何うした原因か叔父はふら／＼となつて意識を失つて了ひました。それから八日の後この氣の毒な叔父は腦膜炎で祖父の腕に抱かれ乍ら遂に逝きました。丁度二十六歳でした。あの「聲」は間違ひではなかつたのです。こんな事でも多少貴下の御研究の御参考とならうかと思ひましたから申上るのです。

一九一八年八月三日サン、ラウル、ゲーにて

アドリアン、ドファイルホル」

聴覚による豫戒は視覚によるものよりも稀れな現象ではあるが、併も此の種の現象としても決して爾く尠ない事はない。否それを拒否する事の出来ない位、澤山の實例があるのである。吾々は之を偶然に歸して了つて満足して居る譯には行かない。

一九一九年八月には紐育の各讀者から澤山の手紙を寄せられた。その中には有名な製造業者ウイリアム、クーバー氏が市街鐵道で壓死したあの事變を、彼の母エラ、クーバー夫人がフィラデルフィヤから見えたと言ふ事が書いてあつた。日夜彼女は子供が車輛の下に壓死して道の上に横たはつてゐる夢を而も二度も見た。餘りの不思議さに彼女は最早じつとして居られず、直ぐフィラデルフィヤを出發して紐育に向つた。翌朝彼地に着いて電車でブロードウェイ第三十三街に行く途中、恰度第七街を横切る際、今し方電車の下敷になつた計りの一人を取巻いて澤山の人が集つて居た。不圖見ると意外にもそれは自分の子供であつたと云ふ事である。尙ほ此等の手紙には多分ウイリアム、クーバー氏は死んで了つた事であらう」と附け加へてあつた。

事實彼は死んだであらうか、自分には分らない。併し夫れでも此は確かに著しい前知的な夢である。彼の母がその子に起るべき事變を前以て知らされたと言ふ事には些の疑もない。然らば如何にし

て分つたか？ 誰によつて知らされた？ 如何なる方法によつて？

此れ實に本書の探求せんとする問題である。

先づ、子供の乗つた車が轉覆したのを見たのは母である。此處に此れと似た話が中間物を通じて起る場合の例がある。次の叙述は初め佛國天文協會の博學なる同僚のストームス、カストロー夫人から聞いたものであるが、尙ほ直接觀察者自身からも聞きたいと云ふ事を夫人に依頼した結果、一九一七年七月九日ピアリッツから來た返事なのである。此は「突然の死」の三日前に見られた現象である。

(三七五〇信)

「斯様な御知らせをする事は、私に取つては此の上もなき悲みを自ら再び呼び起す様なものでございませうが、折角の御尋ねですから申上ります。それは當時兄のルイと一緒に外國に行つて居りました私の息子が、永久に私達と別れを告げました日曜の前の木曜に、その事が豫め知らされた事なのです。此の夢は至つて簡單で次の通りで御座います。

私は見知らぬ家の中で、息子のルイが涙を浮べてゐる姿を見ました。その譯を尋ねますと、「お母様ジャンが死んだのです」と答へました。この子は當時十九歳で、殊に健かな質でしたから、彼の死など云ふ事は夢にも豫感する様な理由はないのです。彼は兄や叔父と一緒に自轉車に

乗つて愉快に散歩してゐた時、急に血管栓塞を起したのです。それから、ずつと後此の怖ろしい豫感のあつた木曜日には、指股が裂けて卒倒した日であつた事が分りました。何と不思議な暗合では御座居ませんか。

も一つ不思議な符合一致の例があります。これは私自身に關係した事です。

私がハンブルグに居りました時、色々の音楽會を催しましたが、其の中の或る會のある日の朝、急に私の頸部に激しい痛苦を感じて、その夜の役はもう出来まいと氣遣はれた程でした。私は直ぐに専門の醫者の所に駆けつけて電氣治療をして貰いました。所が電流の強かつた爲めか、すつかり意識を失つて了ひました。然るに同日巴里の母から私の氣絶したのを夢に見たと言ふ電報が來たので私は吃驚したのです。私の母はその生涯の中、今の言葉で申すと「二重透視」の能力を賦與された人でした。

ベ、マルクス、ゴルドシュミット」

此の手紙には死んだ弟の兄が署名してある。諸君は此等の直感的な事は此の種有能力を持つた人の家庭に於て別段珍らしい事ではないと云ふ事を了解された筈である。次の場合に於ても亦同様である。此の正確な前知的夢の話はアルゼンチン共和國から來たものである。(七九九信)

「聲望高き師よ、私の家に起りました次ぎの確實なる事實を御報告申上るのは私の義務と存じます。そして貴下が全世界に光明を投げられんとする御研究に何かの御役に立つ事でせうと存じます。

私の伯祖母で豫感や精神視力の著しい人がありました。

一八八六年彼女は夢で全く啓示的な室内の光景を見ました。夫れは彼女の友でB夫人と云ふ方が安樂椅子に納まり、熾んに火の焚いてあるストーブの傍に小さな子供を抱いて居る所で、そして一人の女中が火の前で産衣を乾してゐる光景でした。何にも大した注意も拂はずに此の夢を多くの人に話して聞かせました。それはB夫人はこの時最早四十の坂を越した人で、既に澤山の子供の親であり、その上此の七年來子供を産まなかつたのですから、この上子供が出来相にも思はれなかつたからですが、併し此の事が一年後に本當に實現されました。或る夕、産後でまだ床に居る所を伯祖母が訪問しましたら、夢で見たその通りの光景を再び見たのです。部屋の間、道具、火を焚いたストーブ、火の前で産衣を乾してゐる女中、其他皆夢で見た儘の光景が一々再現されてゐたのです。乃ち其の啓示が完全に成就された譯です。

天文臺長閣下、遠く離れた貴下の一讀者の心からの敬意を容れられん事を、且つ又貴下並に吾

等のフランスの爲めに。

一八九九年九月十五日アルゼンチン共和國、ロザリオ、サンタフェにて

エシリオ、ベシエー」

茲にもう一つの例がある。

一八九九年十二月に瑞西から有名な新教の牧師の経験した次の啓示の話を受けた。(八五四信)

「昨週の此處の集會に出席す可き筈になつてゐた牧師の一人であつた人(司教の訪問は十二月三日火曜に始まる筈になつて居た)が、マデルバッドのスヂュストルプの牧師館で前週の土曜の夜に夢を見たのである。夫れは、或る人から電話に呼ばれたので、出て見るとマデルバッドの司教が自分の名を告げて、一人死人が出来たからその日は訪問出来ないだらうと言ふのである。併し夢の世界から電話で呼出した人は生憎死んだ人の名は言はなかつた。此の夢を見た人は翌朝夫れを思ひ出した。正午頃今度は實際に電話が掛かつて來た。それは司教の奥さんが同日の朝突然死んだので司教は訪問者としての務めを果たす事が出来ないからとの知らせであつた。」

此の心靈現象の起つた原因は何であつたか? 「死んだ夫人」? そんな事はあり相もない、それでは、彼の「電話」によつて夢で通信したと言ふ司教であるか? 恐らく然うであらう。併し如何なる

精神の流れによつて? 如何なる類化作用によつて? 司教自身の思想が遠方に放射されたのか?

即ち以心傳心の隔感作用であるのか。

更に次の例も、セルミーン博士の夫れに劣らない悲劇的な事實である。

フオアサツク博士の語る所に依ると、一八五四年或る春の夕、マドレーヌの司祭のドグリー師と貴族院議員のラ、カーズ伯、それから學士院のロンヂエ氏とハル元帥の此の四人が博士の宅で不可思議な現象の話や、豫言的な視力に就いて盛んに談論して居た時、其の中のハル元帥が次の様な話をし出した。

「一年前私がエヂンバラに居た時、私の故友ホルムス君を訪問する爲めに郊外に出た事があつた。所が、その時の邊りの景色が凡て何となく物悲しく見えた。此の日ホルムス君は附近の城で行はれた埋葬式に行つて來たのだが、彼の話によると、その城主の息子は常から所謂透視力と稱する現象を示して、よく家族を驚かしてゐたと云ふ。その息子は時々何の理由もなく喜んだり悲しんだりして、深い憂鬱な顔付をして、切れ切れない言語を發したり、變な幻を描いたりして居た。人々は立派な醫師の忠告から彼に激しい運動をさしたり、又、色々組織的な勉強をさせて此の變態な性質を矯めやうと苦心したが駄目であつた。八日前、家族が集つてゐた時、まだ十二歳

になつた許りの若いウィリアムは突然蒼青になり動かなくなつた。そして彼に耳を傾けて聞くと、「子供がビロードの箱の中に白い繻子の布をつけて寝て居るよ、冠を被り花で取囲まかれて居る。何故私の親達は泣いて居るのだらう、その子供は私だよと言つてゐるのである。恐怖に打たれた父と母は子供をしつかり掴まへて接吻を與へた。熱い涙を濺いだ。間もなく彼は正氣に回つた。そして相變らず年相當な遊びに耽つてゐたが、どこやら他と異つた所を有つてゐた。」

それから一週間も経たない中であつた。朝食後家族一同樹蔭に坐つて居た時今迄其處いらに遊んでゐた小さなウィリアムを探したが見えない。呼んでも何の返事がない。そこで家族の者を始め、家庭教師、召使皆んな總出になつてウィリアムの名を呼び庭園を隈なく探し廻つたが遂に見つからなかつた。一時間の後ウィリアムは溜池の所で風の爲めに岸を離れ様とする小舟を掴へやうとして誤つて溺れてゐた事が發見された。種々手當を盡して見たが、彼は再びこの世に歸らなかつた。これも前知された運命が實現されたのである。」

此等の實例の實驗に關しては本書の第二卷に於て更に死と同時に起る「知らせ」の現象に就て再び論及する時に詳しく説明する事にして、茲では唯だ靈魂の超感的作用を立證しつゝ形而上學的事實の研究に止めて置かう。此の子供は明かに彼の柩を見たのである。

之と同じく不思議な死の豫告がラザル、エレンバック男爵の自叙傳中にも見えて居る。それは一八七七年の心靈科學通報(一二四頁)中に次の如く記されてあつた。

『私は結晶學上の二、三の研究事項について、ウインナの地質専門學校の化學部の主任をしてゐたハウエル氏に助力を頼まうと思つて居た。然るに私は何かの序に彼に話して了つた、彼の實驗室は家の近くにあつた。ハウエル氏は科學界に於ても(恐らく全歐洲に於て)この問題については異數の専門家として知られた人であつた。私は一日一日と訪問を延ばしてゐたが、遂に翌朝訪ねる事に決心した。其前夜私は夢の中で蒼青になつて衰弱し切つた一人の男が二人の人に支へられてゐた所を見た。勿論私は此の夢は別段氣にもかけなかつた。翌日地質専門學校に出かけた。併し實驗室は先年とは違つた場所にあつたので入口を間違つて這入つた。そして本當の入口の戸はその時閉鎖されてゐたので窓からのぞいて見ると、夢で見た通りの光景が見えるではないかい。シアン化カリウムの中毒で倒れたハウエル氏が二人の人に支へられて玄關の所へ運ばれて行く所であつた、それは恰度夢その儘であつた。』

とエレンバック男は尙ほ次の觀察をもつけ加へて居る。

『若し私が今數分早く來て居たらこんな事にならずに済んだのである。彼の自殺は家庭や財産の

心配から起つたのだから、私が恰度やつて貰はうと思つてゐた事で彼に新しい仕事を與へ、從て幾分の物質的な困難を軽減し得たであらう。此の事情は痛く私の心を動かした。彼の死が私の思想、私の計畫の上に及ぼした損失は考へれば考へる程、又、私の試みが永久に失はれたかと思へば思ふ程、愈々増々彼の死が惜しかつた。私の計畫を齟齬せしめたこの死が如何に印象深いものになつたかは言ふまでもない。さればこそ翌朝眼覺めた後までも明瞭に私の意識に残されたのであらう。」

隔感的視力の點から見ると此の自殺者は多分前夜此の絶望的行爲を考へてゐたかも知れない。其れがエレンバック男の夢となつたのだとも言へやう。併しそれは此の夢の重要な素因を説明してはゐない。即ち苦悶せる蒼青な男が二人の腕に支へられて行く光景を何うして見る事が出来たかは尙更説明出来ない。

此の上に偶然に旨く合つたなど、言ふ假説を持ち出すのは實に愚の極である。

此等の事實は「人の靈魂には隱秘的な力があり、未來を見る力がある」と言ふ吾等の主張を漸次裏書して行くものでなくて何であらう。

更に又一つ、此れに劣らず動かす可らざる未來豫見の例が一九〇五年のレビュ、ブリフク、ド、サ

ンマラン紙に述べられてある。

「二十七歳になる卵商人マリノ、トネリは例つも商用で附近の各市場を廻つてゐた。或る時リミンと言ふ市場に行つた時、彼は其處で平常になく酒を多量に飲み過ぎた。それは六月十三日であつた。彼はその日賣り盡して空になつた籃を携へて田舎馬車で家に歸つて來た。多分少し眠つて居たらしい。馬車が曲りくねつて急に下り坂になつてゐるコステ、デイボルゴと言ふ場所に差し懸つた時此の若者は強い動搖と共に道に沿ふた凹地の上に抛り出された。馬車は道端に沿ふて半ば轉覆し、馬は宙に懸つてばた／＼跳いてゐた。トネリは別に怪我也受けなかつた。彼は靜かに身を起して馬を解いてやり、幸ひ通り掛りの人達に手傳つて貰つて、車を起して凹地から曳き出した。

此の時にトネリの眼には月光の下に何うやら母に似た顔の女の姿が現はれて來た。それから疑ふ餘地もない程明瞭な、そして親しみ聲が聞えた時、此の若者は思はず愕然としたのである。殊に老母が彼に抱きついて怪我はなかつたかと言はれた様に感じた時の驚きは何うであつたらう。そこで老母は語つた「私はお前を見たのだ。お前の妻と二人の子供は寝て了つた。併し私だけは何だか譯の分らぬ胸騒ぎがして非常に氣持が悪くなつた。突然私は眼の前に此の道端が見え

た。丁度此の凹地の所だ。車が轉覆してお前が其所に抛り出されてゐる所をはつきり見た。そしてお前を呼びつゝ苦しんで居た。殆んど瀕死の有様であつた。けれども此の最後の不幸丈が眞實でなかつた事を神様に御禮を申上げてゐる。その外は皆私が見た通りである。私は如何にしても行つて見ねばならぬと感じたので、他の人を起さずに、寂しさを、怖しさを、荒れ狂ふ空の事も忘れて、獨りで此處にやつて來たのだ。四吉米も走つて來た。尤もお前を助ける爲だつたら、四吉米は愚か千吉米あつてもやつて來てゐたのであらう」と。

此の話を發表したメツサヂエロの編輯者は次の様に語つて話を絶つてゐる。即ち「予は以上の如く此の善良な人々のその感動に今尚ほ打震へてゐる唇から親しく聞いたのである」とメツサヂエロに發表されて以來一の事實は引續いて一人の教授によつて更に綿密な取調べが行はれた。即ちメツサヂエロ新聞の記事文では未だ物足りない點がある。そこで一層事實を明確にし度いと言ふ考へから、ア、フランシシー教授は此の問題の關係者達に或る質問を企てたのである。此處にその問答の顛末を記して見やう。

(一) 問「最近トネリ君が路上の災難に會つたのは、これが初めてありましたか。」

答「然うです」

(二) 問「此の道ではコステ、デイ、ボルゴと稱する所丈が危険な所であつたのですか？ 少くとも其處が一等危険な場所でもあつたのですか、それとも平常トネリ氏が市場から歸る時に通る色々な道の中には外にも同じ位に危険な場所がまだあるのですか？」

答「トリネーが平常通る他の道々にも又、此の時通つた道にも、もつと危険な所がまだ澤山あります。」

(三) 問「マリー、トネリ夫人が胸騒ぎをして不安に襲はれ出した時には子供が歸つて來る平常の時間を既に過ぎてゐたのですか或は少くとも此の場所に駆け付け様とした時にはその平常歸る時刻を過ぎてからでしたか？」

答「普通の時刻を少し過ぎてゐました。」

(四) 問「母の胸騒ぎし出した時と、又此の事變の幻を見た時とはトネリ君が既に轉覆した後でしたか？」

答「母の胸騒ぎは事實の幻影を見た時から數時間前でした。そして事變は幻の十五分後に起つたので、丁度トネリの家からあの場所迄駆けつける程の時間があつたのです。」

(五) 問「トネリ君は此の時母君の事を思つた様な記憶はありませんか？」

答「家族の事を思ひました。特に母の事を」

(六) 問「トネリ夫人自身にも、子供さんにも今迄何か外に超自然的な事件は起きませんでしたか。」

答「起きませんでした。」

此のフランシツシ教授の照會は此の事實が動かすべからざる根據を有つてゐる事を確立したのである。恰度先きに吾等が述べた事のあつた事件と非常に似てゐる事件が生ずる前に事件を豫見した此の例は母の精神で見たのであるが、先きの自分の棺の幻を見た子供の場合は一種の個人的豫感であつた。

私は既に第四章に記した(一八七〇——七二年間)巴里天文臺長の代理をして居たドローネー氏の豫感の例を思ひ出す。夫れは、行くまい／＼と思ひ乍らついシエルプール灣に出て了つて死んだ話である。私は之に續いてアルセーヌ、フツセーの「ペンマルクの岸に、波に打上けられた妹」の思ひ出る記も掲げて置いた。茲にもそれと似た様な、更にもつと意味ある正確な點に於てもつと顯著な實例がある。ロシヤのボドリーのヨセフ、クロンヘルム男は、露西亞海軍高官の死について次の記事を發表してゐる。それは一八九五年六月、黒海で二隻の軍艦が衝突した際の話である。

「一八九五年の初め、ルユカウスキー夫人は或る夜夫の睡眠中愁訴の聲によつて眼を醒まされた。夫は「助けて呉れ！ 助けて呉れ！」と叫び將に溺れんとする人の様にばた／＼として跳いてゐた。怖ろしい災難を夢見てゐたのである。醒めてから彼は妻に向て「自分は大きな軍艦の甲板に居たが、他の軍艦との衝突から海中に投げ出され波に吞まれて了つた。」と語つた。そして、終りには彼は語を次いで「で自分は早晚必ず海で死ぬと思ふ」と言つた。彼の確信は存外固かつた。彼は恰も命數を知つてゐる人の様に色々と整理し始めた。二ヶ月経つた、夢の印象は最早薄くなつてゐた、其時大臣から黒海に向て出發準備の命令が出た。

ペテルスブルグの停車場で妻に別れを告げる時、ルユカウスキーは妻に「お前は恐らく私の夢を覚えてゐるだらうね」と言つた。「まあ！ 何故そんな事を御尋ねになるのです」と妻は窘める様に言つた。「もう二度と歸つて來られまい！ 再びお前を見る事は出来まいと思ふ」と彼は繰り返してゐたのである。

ルユカウスキー夫人は胸塞つて言葉もなかつた。けれども氣を取り直して只管夫の氣を慰めやうと努めた。夫は尙悲し相に「お前が何と言つて呉れても私の確信に變りはない。私の終りは近づいて居る。何物も夫れを妨げる事は出来ない。さうだ、港が見える！ 軍艦が——衝突の瞬間、

甲板の狼籍、私の最後——皆んな再び眼の前に見える——暫く休んで彼は又、「私の死の電報が着いてお前が喪服をつける様になつたら、私の嫌いなヴェール丈は止して呉れと言つた。夫人はもはや何と答へるすべもなく、只歎歎してゐる丈であつた。汽笛は鳴り、出發の合圖が傳つた。ルユカウスキー氏は夫人をやさしく抱擁した。汽車は去つた。夫人はその頃二週間の間は極度の不安の下に暮した。果然新聞は黒海に於けるウラゲミル、シネウスの兩艦の衝突の災禍を報じた。絶望に氣を失ひ乍らも夫人は直ちにオデッサのツェレノア大將に電報を打つて夫の安否を尋ねた。「御主人の安否は分らないが確かにウラヂミル艦の甲板に居た」と言ふ返電があつた。夫の死の知らせは一週間後に來た。

彼の夢の中で更に附加せねばならぬ事はルユカウスキー氏が一生懸命に跳いてゐる所を誰か乗組員の一人が見てたと言ふ事である。全く一から十迄すつかり實現された譯である。ウラヂミル艦の乗組員ヘニツク氏は此の災禍の際に救命囊を持つて海に飛び込んだ。既に水中にあつたルユカウスキー氏はこの浮囊を見るや直ちにその方へ向つた泳ぎ出した。すると外の者は「二人一緒は駄目だ二人は浮けない。共に溺れて了ふ」と叫んだ夫れでもルユカウスキーは浮きにつかまつて「俺は泳げないから」と頼んだ。ヘニツク氏は「では、夫れを御擲へなさい。私はよく泳げます。私は

身を離しませう」と言つた。此の瞬間に大きな波が來て彼を引離した。ヘニツク氏は助かつたがルユカウスキー氏は豫期の通り死の運命の手に引取られたのである。」

ボザノ氏は此の話を反覆して、豫見すべからざる事情の數々を一つに集めて見ると、偶然の符合などと言ふ假定を排除して他の説明的諸説、即ち運命説、交霊説、托身説などを比較する事が出来ると言ふ事を指摘した。今吾々は單にその事實のみに注意して見る。そして吾々の中に未來を見得る超自然的、能力が賦與されてゐる心靈的要素が存在する事を證明して見たい。

そこで吾人の證明しやうとする問題は未來を誘致する諸原因の中に隱然未來は存在すると云ふ事である。或る心理状態の下に實際正確に未來を見得るものであると云ふ事實である。此等の例はあらゆる時代に發見されるが、併も未だ會てその存在する所以を解釋された事はなかつたのである。事實人間の靈魂の中に存在する能力は本當に今日迄認められてなかつた。茲にあまり有名な事ではないが、モントリユツク大尉の例がある。それは彼の手記コンマンテール第四卷の終りに掲げられたものである。彼が佛國の元帥杖を授けられたのは既に吾々の知つてゐる事である。そして又、一五五九年ヘンリー二世が彼の擬戦に於てモントリユツク大尉が彼の幻想について語つた事實である。

「擬戦の前夜、最初の睡りに於て自分は次の様な夢を見た。王は血にまみれた顔をして椅子に凭つて居られた。それは宛も猶太人が主キリストに荊の冠を捧げ、キリストが兩手を組合せてゐる所を畫いた圖に極めて似て見えた。自分は王を見つめてゐた。それは王の顔と思はれたが彼には何等苦痛の色も見えなかつた。否な彼の顔面には血の外何ものも見えなかつた。その時自分には他の人々が「彼は死んだ」。……「いや彼はまだ死にはしない」と話してゐる様に思はれた。醫師と軍醫が部屋の中から出たり入つたりしてゐた。此の夢が相當長かつたことを信ずる。それは夢が醒めてから自分は曾て考へたこともない事實を發見したからである。私はこの時始めて人間は夢を見ながら涙を流すことが出来ると云ふことを實驗した。自分の顔は自分の目から出た涙に濡れて居つた。而も長い間涙を流してゐたのである。妻は色々自分を慰めて呉れた。けれども自分は何うしても此夢から王の死を信ずるより外はなかつた。これが單なる一場の作り話などでない事は、自分は目が醒めるや否や妻にこれを語つておいたのでも分る。四日の後、侍従長からナール王への飛脚がネラに到着した。それは王の重傷を告げ、そして生命も覺束ないことを齎したものであつた。」

本書の研究に最も貴重な價值を有つてゐる新様に珍らしい例が實に幾世紀の間も顧みられずに居つ

た。そして中には全然否定さへされ、輕蔑され、一笑に附せられて來たと云ふ事こそ寧ろ吾人の驚異に値するのである。

予は又、一六一五年にニコラス、バスキエから彼の父エチエンス、バスキエ（一五二九年に生れ、一六一五年に死去した）の死に就いて、王の顧問官で巴里の執行官であつた彼の兄に一年前に相談してやつたと云ふ次の珍らしい手紙を發見した。

「私は一六一五年八月三十日夜中の二時頃に逝くなつた父について、貴方からの御照會のお手紙を九月三日に拜見しました。このことに關して私の記憶に残つてゐる事だけを申上ります。それは一年前の同じ八月三十日の夜明の五時頃でした。自分は父の傍で眠つてゐる夢を見ました。その時父は床の上に起き上り神に祈りました。父は恭しく兩手を合せて高くあけ、眼を天上に向けてゐました。お祈りが終ると父は急に色を變へて自分の腕の中に倒れて死んだのです。此の夢から醒めると私はすぐこれを妻に語りました。そして記憶を鮮明にする爲に、起きてそれを書き留めて置きました。此の場合に於ける二つの一致した事をお考へ下さい。即ち一は父の死の丁度一年前の同日同時に彼の死を見た事と、一は彼の死の其の日に自分が未だ曾て夢想もしなかつた此の手紙を受けた事であります。この夢をよく分拆して見ると、父の臨終の有様を自分にははつきり

見た事、そして父は僅かに十時間病床に就いてゐたにすぎない事、善良な基督教徒として世を去つた事、父の意識が最後まで極めて明瞭であつた事がお分りでせう。彼の死は平和な、そして尊い八十六年の生涯にふさはしいものでありました。」

然り、是の種の心靈現象の數々は數世紀前から明かに知られてゐたことである。ジュリアス、シーザーが暗殺される其の朝、彼の妻カルプユルニアが既にそれを豫言してゐた。又、ブルータスはフィリッポの戦の敗北が彼の心靈によつて豫知されてゐた、そして又、アルテリウス、ルーフスは夢中に、其の朝彼を刺殺した闘技者を見た事は既に羅馬の著作家が吾人に語つてゐる所である。而も此等の現象は今尚依然理解されてないのである。又、ヘンリー四世の彼の悲劇的な死も、彼の腹心の友スリーによつて豫め告げられてゐるではないか。恚うした實例は他に幾らもある。

天文學には彼のコペルニクスがある、ケプレルがある。ニュウトンがある。心靈科學には未だ彼のヒツバルクや、ブトレミーや、アリストアルクがある丈である。心靈學は今、天文學に於けるコペルニクスの出現を期待してゐるのである。

吾々が今、慎重に研究を始めやうとする種々の觀察は到る所に見出される。だが、その爲めに故ら澤山な書物を讀破する必要はない。

十八世紀の最も學識の高い、最も創見的な學者の一人ビエールガツセンデイは彼のガリレーやベライシユの友人であるが、次の様な豫言的の夢に就て物語つてゐる。

『或る日ベライシユ氏は友人のレーニエ某とニームに旅行した。途中、ある夜友人レーニエはベライシユが夢中に彼に話した事を聞いて彼を起して何の事かと尋ねた。彼は「吾々は既にニームに到着し、その地の或る寶石商がジュリアス、シーザーのメタルを四エーキューの代價で賣つて呉れると云ふので、自分が其の代價を拂つてゐる中に君に起されてしまつたのだ」と答へた。二人はニームに着いて町を散歩してゐるとベライシユ氏は夢で見た通りの寶石店を見付けた。そこで二人は其の店に入つて珍らしい物はないかと尋ねた。すると、店の者は「ジュリアス、シーザーのメタルは如何ですか」と言ふ。代價は何程かと聴くと四エーキューと答へた。ベライシユ氏は急いで其の代價を拂ひ、彼の夢が正しく實現したのを此の上もなく喜んだ。』

此の例でも豫見の實現は豫見其もの、記憶によつて實現されてゐるやうに見える。何故ならばベライシユ氏は夢中に現はれた寶石商の店を認めてゐたからである。

精神病に精通し特にこの方面の研究に權威を有つてゐたイーオステイ博士は、一九一九年三月二十四日の心理學會に於ける此の問題に就ての色々の報告を持つてゐるが、茲に博士自身に關するものを

紹介する。

「一九一九年予が最初に取扱つた一精神病患者が予の生活に就て次の如く語つて居た。

貴方は佛蘭西の中部の小さな町に住んで居られる。……貴方の住居は小さな廣場にあるが、貴方は別に事務所を持つて居る。貴方は其處で澤山の書類を取扱はれる。……まあ何と澤山な書類でせう！ 貴方の室の隣室には多くの人が書き物を書いてゐる。其處から色々の書類を貴下の所へ持ち運んで来る。貴方の部屋と隣室との往復は頻繁です。貴方は彼等の持つて来る書類を見てそれを返してやる。又外から来る人々も貴方に書類を持つて来る。貴方はそれを一々覽られる。又それを返してやる。随分の書類ですね！」

此れは全部嘘であつた。予の當時の生活は大部分純粹な醫學上の仕事と、個人としては心理學に關する仕事であつた。けれども一九一四年八月以後はそれが皆事實となつた。予はこの年ヴィエゾンの野戰病院の軍醫長となり、大戰の最初の二年間は主として事務上の書類に没頭してゐた。」

此未來の豫見は恰も未來の光景の上に開かれてある意から見た様に正確であつた。斯様な個人的豫見の例は屢々見られるが、而も一般的の出來事、就中一九一四年より同一八年に亘る對獨戰爭の恐る

べき國家的大災害に關する種類の事が豫見に現はれなかつたのは慥かに注意すべき現象である。これから考へると豫見は主として心靈對心靈の感應に存するものの様に思はれる。

自分の友達で精勵家であつたムートン博士（一八八九年私の宅で催眠術に就いて面白い實驗をした。その實驗の事は他の場合で紹介し度いと思ふ）は一九〇三年交靈術に就いて詳細な研究に従事してゐた人であるが、その中でも次に掲ぐるものは特に珍らしい報告である。

「八月十九日に開かれた降神會に、或る靈魂がテーブルに乗り移つて「私は先頃死んだヘルマンス夫人であります」と言ふた。博士は長い間、此の夫人と其の夫君を知つてゐたので次の問答は痛く彼を驚かしたのである。

「私の良人は来る九月に結婚いたします、彼は結婚の前に巴里に来るでせうが、時間がないので貴方を招待いたさないでせう」と言ふ。それで「貴女が仰つしやる様な事はないでせう。私は貴女の良人を知つてゐます。私はあの方が妻に持つてゐた切なる愛情を知つてゐます。彼が最愛の妻を亡くして僅か四ヶ月も経たない中に結婚するなどとは迎も信ずることが出来ません」と答へた。すると靈魂は

「けれども、それは本當です。貴方は數日の中私の申した事の眞實な事をお分りでせうと言張つ

た。そこで私は尙假りにそんな事があつたとしても、それは何かの利害關係に誘はれたので決して愛情からのことではないでせう。」

「いえ、利害關係などは何でもないことです。けれども御存じの通り、ルシアン(彼の以前の名)は迎も獨りではゐられない人です。」

「では、あの年頃の婦人と結婚すると言ふのですか？」

「いゝえ、二十三の若い婦人でございます。そして結婚してから少したつと田舎を引き揚げて巴里に出て来るでせう。」

「あの、メデーに勤めてゐられる地位を捨ててですか？ それは本當ですか？」

「不幸な事情で、殊に金を澤山失ひましたので、巴里に出て新しい地位を作らねばならなくなつたのです。」

「併し、貴女の豫言が實現されるものとは私にはどうしても思はれません。假りに貴女の仰つしやる事が本當だとして貴女は此の結婚を不快な氣持で御覽になるのですか？」

「どういたしまして。ルシアンは獨りでは居られないのですから。」

此を最後の言葉としてテーブルは動かなくなつた。數分間の後「もう仰言ることはないのです」

か」と尋ねると、「ハイ」と答へた。

その後夫人は再び表れなかつた。

此の場合何人も此の啓示を豫想したものもなければ何人も此のお告げを眞面目に考へるものもなかつた。尤も私の家の二、三人と私一人とが此の亡夫人を知つてゐる丈であつた。そして此の會に列席した他の人々にはヘルマンスの名さへ聞えなかつた。

數日の後、八月二十七日に私はその友人から手紙を受け取つた。其の中に某夫人と九月に結婚すると云ふ事が書いてあつた。又、彼の此後の方針に就いて言つて寄越した事は、既に予が八月十九日に彼の亡夫人から告げられたものと全然一致してゐた。

一九〇四年三月、彼は私を訪ねて來た。そして巴里に居る様になつたことを告げた。その時私は亡夫人のお告げを話した。彼はそれを是認し乍らも非常に愕いてゐた。そしてその降神會の記録を見たいと言ひ出した。彼は彼の最初の妻の言つた凡ての事は全然眞實である事、就中彼の二度目の結婚の前に巴里に來た事、地位を變へる様になつた事は何れもその通りであると言つて、餘りの適中に彼は唯だ茫然として居つた。

彼は斯く凡てを肯定した。この事實から吾々は死後に尙自己を保持すると言ふ實證を得たと同

時に、それは死んだヘルマンス夫人と同一人なる事を證するのである。」

ムートン博士は此の事實は彼をして心霊存在の信仰者とした最も有力な原因であると言つてゐるが、果してそれに相違ない程絶對的價值を有つた事實であつたらうか。

それは吾人の思想がそれ等事實の象徴的な陳述を引き出す爲に、意識的にも無意識的にも働くものであることを證明されたのである。ムートン博士と其の家族はヘルマンス夫人を知つてゐた妻を失つた良人が再婚すると云ふ思想を有つてゐた事も決して無理なことではない。況して彼は既に再婚の意志を此の會の一週間後に彼の友人達に告げてゐたのである。田舎を捨て、巴里に出やうとする計畫も、彼が既に心の中に持つてゐたものではなかつたらうか？

予は死んだ夫人が果して啓示の本人であつたか何うかといふことには容易に信を措き得ないのである。又そのお告げなるものも、何か他の心靈上の作用に基いてゐるのではないかと思はれる。此の重要な問題について別に論すべき機会もあらうが、茲には唯だ本當に未來に起る事件を正確に告示された一例を紹介するに止める。けれども予は斯の特種な場合に於ても他にも恁んな事がよくある様に、ムートン博士の友人の先妻は生きてゐる間にも第二回目の彼の結婚の事などを時として豫想して見たり、又、その場合の自分の考へなども漫然と決めてゐた様な事があつて、それが知らず／＼の間に口

授者の思想に移つたのではないかと云ふ事を附加して置きたい。吾人は茲に再び第三章に戻つて死の表現に就て論じたいと思ふ。

アルスの有名な牧師ヴィヤンネイ僧正（一七八六——一八五九）は彼の未來の豫知の能力に就いて五つ六つの例をあげてゐる。

茲に掲ぐるのはその一つで彼の傳記中から拔萃したのである。

『若い婦人達の救済會の創立者マリーヴィクトアール尼僧は事業の始めは二人の同僚と共にアルスに居つた。其の一人は現に彼女の助手である。』

或る朝、三人で出かける前にヴィヤンネイ僧正の彌撒を聞かうとしてゐた。僧正は彼女等に近づきマリーヴィクトアール尼僧に向つて如何にも俗人に言ふ様に、

「直ぐ出かけなければならぬよ。」と言つた。

「然し、牧師様！ 私は聖い彌撒をお聞きし度いとおもひますが……。」と彼女は全く吃驚して答へた。すると牧師は

「いや、娘等は直ぐに出かけなければいけない、それはお前達の中の一人が病氣になるからだ。若しぐづぐづしてゐるとお前達は此處に残らなければならなくなる、お前達はもう行くことが出

來なくな。」ると諭した。

實際彼女等の住んでゐた所から一寸離れた所で、この三人の中の一人で、その時からマリーフ・ランソーズ尼僧となつた婦人が非常に氣分が悪くなつたので、二人の友は彼女を抱いて家まで送らねばならなかつた。それが誰れも豫知することの出来なかつた病氣の初めであつた。」

ヴァアンニー僧正は卓越した心靈能力を有つた人であつた。彼は説明の出来ない音の様な幽冥な表現を魔神の業に歸してゐた。併しその魔神の存在を證明すべきものがなかつた。

兎に角、此の豫見は役に立つものであるが。一般の入々は大概それを信用することをしないその代り又何も妨げることも出来なかつた、唯だ此處に小兒の生命を救助した一例がある。

それは英國心靈學研究會の發表した非常に正確な報告でエヂンバラの鐵道線路に於て、機關車が覆して三人の死者を出した時、恰もその邊に遊んでゐた少女を未來の豫知によつて救助し得た物語である。此の珍らしい事實に就いて、其の母親は次の様に語つてゐる。

『私は娘に三時から四時までの間遊んで來ても可いと言つておきました。その時、娘は一人だつたので、私は『鐵道のお庭』に行くやうに言ひました。(其の名は土地の人が鐵道と海の間にある狭い土地に付けたものです) 娘が出て行つてから數分経つと、私は底の方から「彼女をすぐ迎へ

にやれ。でないと怖ろしい事が起るぞ」と云ふ聲がはつきり聞えました。私は其れが又自分の氣の所爲だと思ひました。そして天氣が斯んなに好いのにも何も悪い事が起る氣遣ひはあるまいと思つたので、娘を探しにやりませんでした。

けれども、一寸過ぎると又、同様な言葉が、而も前よりも急しく聞えるのです。私は尙ほそれを自分で打消してゐました、そして私の子供に起り相な事を想像して見ました。狂犬にでも出逢ふのか？ まさかそんな事があり相にも思はれないし、さうかと云つて自分の氣の迷ひで娘を賑々呼び戻すも餘りに馬鹿氣た事だと思ひました。けれども何うしたものか益々不安が募つて來るのです。それから一寸の間、強ひて自分の心を制して故ら他の事など考へてゐましたが、間もなく同じ言葉で、「娘をすぐに迎へにやれ、でないと恐ろしい事が起るぞ」と云ふ暗示が頻りに起るのです。同時に私は激しい戰慄と極めて怖ろしい印象とに襲はれました。私はもう堪え切れなくなつて急いで立ち上り、ベルを鳴らし女中を呼んで娘を迎へにやりました。そして私はかの時獨りで「でないと何か恐ろしい事が起るだらう」と繰り返してゐたのです。

十五分ばかりたつと、女中は娘と一緒に歸つて來ました。娘は意外に早く呼び戻されたのに怪訝な顔をして「また家にゐるんですか」と尋ねました。

「いいえ。さうぢやないんですよ」「鐵道のお庭」にさへ行かなければ構はないのー 何處へで行もつて遊んで御出で、お前の叔父さんのお家へでも行つてお従兄弟さん達と遊んで來たらどう？」と私はかう答へました。

それでも私は娘が前に居つた場所に何か怖ろしい危険が付けまゐつてゐる様に思はれてならなかつたのです。

其刹那でした。機關車と貨車が脱線して柵を突き破り、子供がよく座つてゐた岩に衝き當つて轉覆したのです」

斯様に、若し居れば當然一命はなかつた娘が不思議な現象で助かつたのである。それは家族の隣人の證言を得て確認された。之は一八六〇年七月の出來事で、心靈學研究會々報の外に、予も亦一九一二年五月の雜誌に載せた事であつて一點疑ひの餘地のない正確な事實である。

私は又更に是れにも劣らない顯著な豫見的事實を茲に附け加へたい。其は前同様神秘的な聲に依て全家族の生命を救はれたものである。

「一八七七年一月の事であつた。その頃私は休暇中の二人の息子とブルークリンに居つた。或る夜私は彼等を芝居に連れて行く約束をした。そして前夜から三つの席を買つて置いた。

其の日の朝、私は何處からとなく「芝居には行くな、お前の息子等を學校へ歸してやれ」と云ふ聲を何遍も執拗く感じた。私は務めて自分の氣を紛ぎらさうとした。けれどもその聲は次から次と益々高壓的に繰り返される様な氣がした。そして正午頃になつてもそれが鎮まらなかつた。そこで私は友達にも自分の子供等にも芝居行きは止さうと言ひ出した。友達は折角子供等が楽しみに待つてたものを今更取消すのはよくない。殊に稀^{たま}に行く事でもあるから、是非約束通り實行する様にと切りに私に勧告するのである。この上反抗するのも何うかと思つたので私は不承不承に意見を變へることにした。

併し午後になつて此の聲は一層執拗くなつて來て、印象は次等に明かに刻まれた。夕方芝居の始まる時刻になつて、私は斷然芝居は止め、その代りにニューヨークに行かうと言ひ出した。而して三人で出發した。

其の夜その劇場に大火災が起つて二百五十人の人が焼死したのである。斯くして吾々は死を免れた。

私の生涯に事件を豫感した事はこれより他にはない。私は性分として重大な理由がなければ約束を變更する様な事はなかつた。

既に三枚の切符を買ひ求めた。全く其の晩を愉快に過さうと思つてゐたのである。然も自分の意志に背いてそれを中止せしめた原因は一體何であつたか？」

これはマツクゴーン船長がバレット教授に個人的に洩した話である。尙ほ彼は「内部からの聲が非常に明瞭に私に響いたのである。恰も其は本當に體内に誰かが居てその人に話される様に感じた。そしてその聲は朝食時から私の子供をニューヨークに連れて行つた時までも執拗に續いてゐたのだ。私の妹は尙その前日買求めた席の三枚の切符を所持してゐた」と説明した。

最早此れ以上に類例を附加するの必要はあるまい。併し茲に最も典型的な例がもう一つある。これは如何なる頑迷な人の心にも斯うした事實の存在を植附けずに置くまいと思ふ。

一八八六年一月七日午後四時（正確な日記による）ナンシーの有名な醫師の所へ某と云ふ一目神經質の一患者が診察を受けにやつて來た時の話である。

「六年前、即ち一八七九年十二月二十六日、此の青年は巴里の或る通りを散歩してると入口に「巫術師マダム、ルノルマン」と書いてある表札を見つけた。彼は好奇心に唆られてその中に入つて見た。巫子は彼の手を觀てから次の様に言つた。

「貴方は一年内に父親を亡くしますよ、丁度今日と同じ日に。間もなく貴方は兵士になります。

（彼は其の時十九歳であつた）併しそれも長くやつてゐることはない。貴方は若くて結婚し、二人の子供を擧げるが二十六歳に死ぬでせう」と。

彼は此の馬鹿／＼しい豫言を心の中に嗤つた。そして友達や、家族の者共にそれを話した。然るにそれから一年後、彼の父親は一寸病床に就いた計りで一八八〇年十二月二十七日に死んで了つた。丁度巫子に會つた一年後である。彼は少し薄氣味悪く感じて來た。間もなく彼は兵士に擇られた。それも僅か六ヶ月間で除隊となり、結婚してから二人の子供の父親となつた。さうなる彼は非常に氣を揉み出した。二十六歳が心配になつた。最早生きてゐる様な氣もしないので豫言された日の數日前、彼はリエボール博士を訪ねて此の運命を避ける工夫はないものかと相談した。彼は既に四つの豫言が悉く適中したのである。残つてゐるのは彼の死だけである。彼の怖ろしくなつたのも無理もない事である。

この時の事に就て博士は下の如く述べてゐる。「其の日も其の翌日も自分は彼を深い眠に陥れやうと試みた。そして彼の心に刻みつけられた暗い妄想——近々に彼が死ぬといふこと彼の誕生日の二月の四日に（此の日附は豫言者も言つてゐないことではあるが）彼が死ぬと想像してゐる考へを打ち消さうとしたのである。けれども、彼の神經は非常に動搖してゐたので、私は最も深い

眠りにさへ彼を導くことは困難であつた。そこで私は何とかして是非彼を自己暗示から救ふてやりたいと思つたので、同じ私の患者で、ある夢遊病者に診察して貰へと彼に勧めた。その患者と云ふのは「豫言者」と呼ばれてゐた者で、彼は四年に亘つた癡麻質斯患者の恢復期や又、彼の娘の恢復期も確實に明言した人である。

彼は私の忠告を容れ夢遊者と會見した。彼は最初に「私は何時死ぬでせう？」と尋ねた。老獪な彼の夢遊者は此の若者の不安を察し少しく待たせた後で、「貴方は四十一年の後に死ぬ」と傳へた。此の一言に魅つた若者の喜びは一と通りでなかつた。彼の元氣は直ぐ回復し、希望に溢れて來た。そして彼がかく恐れてゐた二月四日を越した時は彼はもう大丈夫救はれたものと信じたのである。

その後、私は久しく彼の消息を聞かなかつたし、自分も少しも彼の事を老へたこともなかつた。十月の始め、私は不幸な彼が遂に一八八六年九月三十日ルノルマン夫人が豫言した通り二十六歳を一期として死んだと云ふ通知を手にした。尙私の報告を確むる爲めに、記録と當時の手紙を所持してゐるが、それは否定すべからざる二つの證據である」と。

以上リエボル博士の物語りであるが、今これ等の事實を分折し解剖して考へる。豫言者が十九歳の

青年に對して早晚彼が兵士になり、次に結婚すると豫言したことが適中したからとてそれが別段に不思議なことではないとしても、尙其所に四つの符合がある。即ち第一彼の父親が一年後の丁度其の日に死んだこと、第二、彼が普通の期間よりも早く除隊になつた事、第三、二人の子供の出生、第四、彼が二十六歳に於て死んだ事である。

これをしも偶然の一致とか符合とかに押し付けて了ふ事は亂暴の極である。吾々は既に此の事實のみでも信念を建設するに充分ではないかと思ふ。そして假令是の種の事に全然信を措かない人々にしても、既に明確な如上の事實をも否定する様な物好を敢てする事は恐らくなからうと思ふ。何となれば平和を愛する人情は好んで言ひ分を立て、不利な問題を惹起する事を避けるものであるからである。けれども、誰れでも常に斯様な現象を作り得るものであらうか。吾人は此等死の各條件に就いての研究は悉く疑問點を以て充たされてゐることは疑ふべからざる事實である。殊に次に掲ぐる様な極めて奇怪な場合の如きは如何なる形式で説明し得べきものであらうか。

『佛蘭西北部の大都會に住んで居たルヌー氏は二十八才になる人であるが、一九〇〇年五月二十四日の夜、彼は次の様な夢を見た。彼が行きつけの理髮師の所にゐると、其處の妻君が彼の爲にトランプ占ひをした。今までに彼女が恚んな事を言ひ出したことは一度もなかつた。彼女は

「貴方のお父さんは六月の二日に死なれますよ。」と彼に言つた。

二十五日の、朝ルヌー氏は此の夢の事を家族に話した。彼は當時親の許に住んでゐたが、此等の家族の者は何人も斯様な事を餘り信じない人達であつたので、彼等は笑ひながら聞いてゐた。父のルヌー氏も其の時分長い喘息を煩つてゐたが、其の時は大分良くなりかけてゐた。彼は六月一日知合の人の葬式に出て友達の一に此の夢を話し乍ら元氣よく「若し俺が明日死ぬことになつてゐるのなら、結局時日が費からなくて却て結構な事だ」と冗談を言つてゐた。

斯うして其の日は何の異状もなく過ぎた。其の夕方息子の一人が——ヴェルダンの兵士であつた——許されて歸つて來た、そして一家團聚して宵の中を愉快に過した。

十一時半例もの通り父親のルヌー氏は寢に就いた。夜中突然彼は呼吸が切迫して非常に苦しい咳をし出し、遂には滑らかな血塊のまじつた痰を吐き出した。すぐ醫師の許に人を走らせたが既に手おくれであつた。その夜の十二時二十分、即ち六月二日に彼は死んだのである。」

此の話は家族の希望で特に名前又は變へて「科學の新天地平線」といふ雜誌の一九〇五年六月號に發表されてゐる。そして此の事實を報告したサマズ博士も亦之に就て更に當事者の説明を求めた。彼は懷疑派の學者は此の事實を單なる偶然の符合に過ぎないといふ反駁の下に簡単に片附けて仕舞ふであら

うと言つてゐる。心臟の弱いルヌー氏は此の夢から非常に強い印象を受けた。而して彼の息子が歸つて來た爲に再び興奮し、それが第二の原因を成し既に興奮状態にあつた彼の想像は其の反動として終に最後の危機を自ら決めてしまつたのである。けれども最初彼にしても、家族の誰にしても、此の不思議な夢に何等注意も拂つてゐなかつた。然らばその原因は何處から來たのか？

更に次の様な豫見的な夢に就て考察して見やう。

一九一三年三月八日、佛國赤十字婦人會の會長で海軍病院々長の夫人であるスザンヌボネフホア夫人から次の様な重要な報告があつた。

「貴方の御研究資料に加へて頂きたい豫見的の一事實を御報告致したいと存じます。

それは去る一月十八日午前八時頃でした。クリスチーナ街に住む辯護士で、シエルブル氏の主席助役をして居られるフェロン氏の召使が來て主人が變死した事を告げました。氏と私とは友達と云ふよりも寧ろ兄妹といった間柄でございました。私はこの知らせに吃驚して、すぐ馳けつけました。フェロン夫人は二十八年前に今の良人と結婚され、二人の仲も大層睦しかつたのです。夫人の言はれるには「宅は一月前から、一月の末は見ないだらうなど、よく繰り返して居りました。此の間、お友達達の埋葬に参りまして其の晩に妙な夢を見たのでございます。それは、その友

達が夢に現はれて「これ／＼の日に君は僕と一緒にいるのだ」と言はれた相です。

この時フェロン夫人は獻秋の爲に一寸話が途切れましたが、恰度そこへナボレオン廣場に住つてゐるレフランプ夫人が入つて來たので、再び次のやうな事を語り出したのです。「私の良人は夢で母親の死ぬ事を豫言したばかりでなく、實は奥さんー貴女の御主人のお亡くなりになる事で存じてゐたんでございますよ。一九一一年に御主人と貴女がヴィシーにお出かけになつた時、良人は私に「レフランプ君は妻君の保養の爲にヴィシーへ行つたが、彼處から再び無事に歸つて來まい」と申したんですと語つた。實際彼は保養地で重い肺炎に罹りました。

私はこの訪問の後、遂にあの召使に會つたので、私は「フェロンさんは昨夕も市役所で大層元氣で居られたのですが、まさか、こんなに早くお亡くなりになるとは何うしても信じられません。お氣の毒でした」と言ふと彼は「え、奥様それどころぢやありません。フェロンさんは私等に一月の終りは見られないと云ふ夢を見たなどと言つてゐました。そして大變それを氣にして居られた様でした」と答へました。フェロン氏は往來で急に心臓癱瘓を起しそれから三十分でお亡くなりになつたのです。彼はシエルプールでは相當に尊敬を受け、財産もあつて、殊に健康な人でしたから、凡ての點に於て幸福な生活を送つて居られたのです。

昨三月五日フェロン夫人と此の不思議な豫言の懷舊談を致しました。夫人の仰つしやるにはフェロン氏は最早外の人に生れてゐるのだと確信してるとの事でした。

シエルプール市ポール街一三

スザンヌボネフォア」

一九一四年九月予はシエルプールに居た事があつた。その時ボンヌフォア夫妻は前掲の事實を確證してくれた。其の上マンシュ縣のビアル氏も亦前者と全く關係無く予の爲めに特に證言を與へたのである。彼はシエルプール市の助役の急死に驚いた人の一人で、其の事情もよく承知して居つた。

此等の事は全く存在することであつて、否定しても無益な事である。それは反對に吾々に教へる所が無ければならない。

茲にも同じ様な興味のある例がある。それは一九一八年四月十三日ボンオードヌールの商人ハルレイ氏から態々予に知らして呉れたものである。

カスタラ博士は或る夜夢に或る男が彼の寢臺のカーテンを上げて彼に次のやうな事を言ふのを見た。それは、第一は非常によい地位、第二は四十歳で死ぬと云ふのであつた。彼はその豫言された日が來ると、彼の友達を招待して盛んな晩餐會を催した。その席には彼の祖父や祖母も列席した。そしてその凶事の終る時刻まで祝つてゐた。然るに眞夜中になつて彼は劇烈な齒痛に襲はれて死んで了つ

た」と云ふ。

他の一例。

有名な自然科学者で、智利國コンセプスオン市博物館長であるエドヴィンリートは彼の死ぬ少し前までは勝れた健康の持主であつたが、死の二ヶ月前、夢に彼の散歩してゐた並木道の端まで行くと、其處に十字架の墓標が立つて、その上に「リードの墓、一九一〇年十月七日」と書いてあつた。彼は此の奇妙な夢を色々な場所で、半ば戯談のやうに多くの友達に話した。暫くしてリード氏の養女で、メントサに住んでゐるR夫人は或る夜彼女の結婚記念日（十月の七日）を祝ふ仕度をしてゐると、來る贈物も來る贈物も皆葬式の花環であつた。

リード氏ば一九一〇年十月七日に死んだ。死に先だつ數日間彼は豫言された日を心に覚えてゐたが、左程氣にかけてゐた様子も無かつた。

予は前に多くの類似した事實を引用して未來は豫見し得ることを實證し得た。けれども、此は本書の目的ではない、其の事に關しては近々上梓さるべき特別著書として出すことゝした。要するに本書に於ては五感に關係なく精神の作用が存在するといふことを明確に立證し得ればよいのである。そして以上述べた諸例にて充分に、否なそれ以上に目的を達せられた事と信じる。

各頁に涉つてよく熟讀された讀者は最早靈魂の存在と其の作用は純然たる心靈的であると云ふことに就て些の疑を持たれまいと思ふ。

遠慮といふ事實を認められない過去幾世紀の間はこれ等の現象は天使か惡魔の働きに歸してゐたものである。そして心靈と肉體との存在の區別を微かながらも注意され始めたのは僅々五十年前からの事である。而も今日に於て吾人は一方の腦から他の腦に對する以心傳心的或る力の存在、精神波は距離に關係なく傳播するものであると云ふ事を考ふるに至つたのであつて、其れは決して不可能なことではない。けれども、吾々が今、昔の人を笑ふ様に未來の科學は又、現代の科學を嘲笑するであらうといふ事も勿論可能な事ではあるが、而も其の説明は何うであらうとも、豫見的の夢や種々な方法に依る未來の透視は既に事實に於て正確なものである。其の研究は其を立證してゐる。而して吾々の考へてゐるのは主として此の點である。

吾々は既に此の未來視力に關係した色々の記事の中で、まだ何うにも説明の出來ない占星學に依る未來の豫見、豫知、豫告の事を紹介して置いた。けれども、吾々の運命は星の上などで判斷の出來ないものであると云ふ事は、現代の天文學が天動説や人間中心説の誤を證明してゐる以上、それは非論理的なものである。それは絶対に承認さるべき事ではない様に思はれる。然し、一方には幾多の豫言が

それに依て實現された様な珍らしい例はある。其等に就て一々茲に紹介する餘地は無いが、只有名な天文學者で而も立派な人格の人に依て提供された事實談の一、二の例を引用して見度い。

ダビッド、フアブリキウスはプロテスタントの牧師で、一五六四年エフセンに生れ一六一七年レステルハフトで死んだ人であるが、彼は又有名な天文學者で彼の鯨座の變星ミラ星を發見した人である。そしてティコブラヘやケプレルとともにその研究上の交際を持つてゐた。彼は星座から考へ出して、一六一七年五月七日が自分の終焉であると計算した。其の日彼は事變を防ぐ爲に出来る丈の注意を拂つた。午後十時夢中になつて仕事をした後、少しの間庭園を逍遙する積りで外へ出たその時ジャンホーエルといふ惡漢が物蔭から飛び出して乾草杈で此の不幸な牧師の頭を碎いた。彼は其の晩の中に息が絶へた。

又彼の友達ティコブラヘも、星の觀測から或る日が彼に取つて危険であることを知つたと云はれてゐる。それで彼は出来る丈の注意を拂ふてゐたが、その日の晩にモードウリュウブ、バルスベルヒといふ刺客に襲はれて、鼻を削がれた。これが爲にこの有名な天文學者は餘儀なく銀製の假鼻をつけることになつた。實際彼の肖像には鼻に曲つた縫目がある。

ジャンストウフレ（一四七二——一五三〇）も占星學に造詣の深い人で、少くとも彼自身の事に就

いては正確に當つてゐたと云ふ。彼は占星の研究から或る一定の日に何か頭の上に重い物が落ち來て、それが因となつて死ぬであらうといふ事を信するやうになつた。そこで彼は其の日は故ら外出を止め、友達を招待して無事に一日を暮して喜んでゐた。すると、彼は書棚の上にある書籍を取らうとした途端に棚板と書籍が彼の頭上に落ちて來て強く彼の頭を打つた、その爲め彼は死んで了つた。此の三つの例によつて單に偶然に歸することの出来ない數多い符合の場合を茲に掲げないでも充分であると思ふ。天體も其の解釋の仕様によつては占者の取扱ふトランプと同様、さう馬鹿にしたものではない。要するにフアブリキウスも、ティコブラヘも、ストウフレも此等の豫言をなした時、彼等はあ

る神秘的な超自然的直覺作用に導かれたのである。茲にラドウィル公の姪の直覺に就ての一例がある。それはクレキ侯爵の「追想」の翻譯者から報告されたものである。

『ラドウィル公爵は孤兒となつた彼の姪を引取つて養女とした。彼はガリシヤの或る城に住んでゐた。此の城には一つの大廣間があつて、此が公爵と子供等の部屋を距てゐた。それで、兩方の部屋の往來には此の廣間を横切るか又は庭を通らなければならなかつた。

當時まだ五才か六才の幼いアグネは何時も此の廣間を横切る毎に引き裂くやうな叫びを出すの

であつた。そして彼女は怖ろし相に戸の上に掛けてあつた大きな額を指した。其れは伊太利の有名な巫子の繪が書いてある額であつた。人々は唯だ此を少女の虫嫌ひの爲だとのみ思つて居たので、何うかしてこの嫌惡の念を取り除かせやうと努めた。けれども最後には何んな惡戯をされるかと惧れたので、彼女の言ふ通り廣間の中に入れないことにした。それ以來彼女は十年か十二年間といふものは雪が降らうと、何んな寒い日であらうと廣い庭を通つて往復して居つた。

此の時少女は妙齡に達した。そして若い伯爵夫人として結婚することとなり、既に其の約束が出来た。或る日、此の城に多數のお客を招待した。集つた人々は宴が終つてから何か賑かな遊びをしたいと望んだので、其の夕舞踏會を催す筈になつてゐた例の大廣間へと繰り込んだ。若い人々に取り巻かれて多少上氣したアグネスは不知／＼客人の後に隨いて例の戸の關をまたぐや、彼女は一足後に退つて恐怖の色を表はした。人々は其處から例の様に彼女を先に立たせ彼女の婿さんも彼の友達も續いて這入らうとした。伯父などは彼女の未だに小供らしさを笑ひながら彼女を部屋に入れて戸を閉めた。彼女は這入るまいとして戸を押した。この抵抗から上の額を揺り動した爲めか、さしもの大きな額が彼女の頭上に落ちて無慘にも彼女は其場に即死した。」

本書も漸く終りに近いて來た。予はこの上に多くの例證を引用する事を止めたい。讀者は恐らく理

解されたことと思ふ。

結論——『未來は豫見し得る』

今日の人智の程度では、この視力が吾々の精神中に如何に働くものであるか、そしてそれに關係して起る感覺の説明が未だに出来ないのである。心靈的存在である潜在意識が異常な働きをする時、例へば正確な未來透視の如き場合は、空間と時間、言ひ換へれば吾が物質界を支配する諸法則の限界を超越した超自然的能力の働きであると考へ得られる。故に未來の事物は現在過去の事物が同様なる平面にある様に現はれる。既に人間の能力は未知なる法則にも及んでゐる。事實が未だ説明されてないと云ふ口實の下に其れを承認出来ないと云ふ理由は少しもない。そこで若し此の存在即ち心靈組織が人類の全き、そして永遠の人格を作るものならば——最も多くの、最も神祕な源泉に依つて育くまるる人格を作るならば、現在の物質界の法則だけでこの問題を解かうとするのは抑も無鐵砲なことであると言はねばならない。睡眠中とか或はその人の精神的傾向の極めて都合よくなつてゐる時、肉眼で見ることの出来ない世界から來るある力が潜在意識の中に浸入して其處に或る知識を與へることが出来るといふことを想像することは決して不合理な考へではないであらう。而して其は過去現在の事件、殊に未來の事件の發見といふ事に依つて立證される。人が生きてゐる間も、死後も靈魂は見るこ

との出来ないエーテル界の中に浸つてゐるのである。

如何に嚴密に事物を検しても、如何に精確な論理を用ゆるとしても、吾々が眼無くして見、未來の事變を豫想し、離れた所に起つた事や、未來のことを知り、體の組織又は全然心の外に起つた事を知る事の出来る智的能力を、物質、腦或は腦の分子の化學的或は機械的結合に歸することが出来るといふ結論には全然到達し得ないのである。要するに此等の觀察によつて感覺に關係のない内在的な能力を有する精神の存在することが分る。

地上の生活に於て靈魂は其の職務に順應せる腦髓に附隨してゐる。健全なる身體に健全なる精神は宿るものである。

そして、靈魂が腦髓の產物でなく又、腦脊髄神經系統に關係のないものであつて、其れ自身獨立してゐるものとしても、靈魂が腦髓から分離される理由はない。

未知の書を読む様な或る種の現象は、特別な能力を有する精神の存在を證明してゐる吾々にも斯かる心靈があると言ふ事は言へやう。けれども、それが實驗者の心靈に他の心靈の干涉があつたと云ふ事は證明されて居ない、併し假設は存在する。何故ならば若し精神が死に依つて消滅せずして、其の精神は何處にか存在し、或は又、吾々の精神が吾々の生存してゐる間に隠れたものを發見することが

出来るならば、死と同時に此の能力を失ふべき理はないからである。

吾々が色々の現象を吾々精神の作用に歸するものとしても尙ほ精神が未來に働く可能を承認し、同時に此の二つの假設の輕重を比較しなければならない。

此等讀心術、占斷、豫見、心靈作用、交靈現象は何等疑ふ餘地なく吾々の無意識の中に吾々に依つて實現されるのである、そして、それは吾々の外界にも心靈が存在するといふ假設と同じ様に、複雑な作用を胎んでゐるのである。

此等の二要素（吾々自身の心靈と外界の心靈）は共に働いてゐるやうに思はれる。即ちこれは吾々自身の心靈能力と、時には眼に見えない心靈の作用である。吾々は排他的であつてはならぬ。

吾々は全く神秘の中に泳いでゐる。そして、此の神秘こそ吾々の知識の渴望となつてゐるのである。

現代の科學知識で説明し得るもののみを承認しやうとするのは大なる誤りである。たとひ一の觀察を説明し得ないからとて直ちに其は眞實でないといふ證明には決してならない。學者は常にアラゴが流星の話に對すると同様な態度で居らねばならぬ。彼は、

『支那人は流星が其の時の事變に關係を有つてゐると信じてゐる。彼等が流星の表を作つてゐる

のは其の爲である。併し吾々が此の迷信を笑ふ権利があるか何うかは知らない。歐洲の學者が事實の證據を否定してまでも、空中から石が落下して来る譯はないと斷言した。彼等は果して支那人よりも賢なりと言はれやうか？ 一七六九年の學士院會ではリュセ附近に落ちた隕石——落ちた刹那に拾はれたもので、而も數人の認めた——が天から落ちたものではないと明言したではないか。最後にジュリアツクの村役場の調書には一七九〇年七月二十四日に畑の中にも、屋根の上にも村の通りにも石が澤山降つた事が記載してある。而も當時の新聞ではそれを馬鹿々々しい話であるとさへ論じてゐるではないか。

説明のついた事實だけを承認する科學者は輕信過ぎる爲に非難を受ける人よりも遙に科學の進歩を妨ぐるものである。」と

予が屢々繰り返して述べた事であるが、事實が説明されなければ承認すべき價值がないものと考へるのは全然心得違ひである。現象の理解、不理解といふ事は存在するや否やの問題とは素自から別である。其はキクロが既に言つてゐる事である。

まだ理解されないことも事實は依然として事實である。併し理解し難い説明はまだ説明ではない。而して既に吾人の見た精神能力の働きから、人間の中には身體の組織とは全く別な心靈的要素がある

事、そして空間と時間を透して見えざる世界に侵入し、未來も過去や現在と同様に現はれるものと云ふ事を立派に證明したのである。

吾々は茲に輕視すべからざる靈魂の世界に就いて研究するのである。

死の神秘を解く爲めに、そして靈魂が生き残るものであると云ふ説を確立する爲めに、先づ靈魂は個人的に存在することを承認しなければならぬ、そして其の存在は腦髓の特質や化學的反應又は機械的反應と全くその性質を異にする或る特別な、無形な肉體を超越した作用によつて證明されるのである。其の作用は全く根本から靈的である。言葉なくして働く意志、肉體的効果を誘出する自己暗示、豫感、感應、以心傳心の現象、閉ぢた書物を読む視力、離れた土地を見る視力、未來の事變情景を見る視力等、此等は凡て吾人の生物學的組織の作用の範圍外にある現象であつて、吾々の有機的感覚と共通な範疇に在るものではない。即ち靈魂は其れ自身存在することを證明するものである。

予は此の證明が最も嚴格に、そして充分に爲されたことと思ふ。心靈現象を観察すれば宇宙は吾々の動物的存在に係る五官の働きでのみ達する事の出来る事實に限られてゐるのではない。他の體系が存在するのである。

斯くして精神的實在の個々の存在は認められた。そこで吾々は更に同じ實證方法によつて死、その

ものに關する現象、死なんとする人の表現、生者と死者の顯示、心靈的存在の成立、幽靈屋敷、死者との交信、精靈原子（エーテルの如きもの）が身體が破滅した後も生き残つてゐる事等を研究して見度いと思ふ。本書は主として生者に關した事を取扱つて來たのであつた。

これから、死に關係して死後にまで及ぶ事に就て述べる。此の新しい心靈學の一組織は論理的に左の三部分より成るものである。即ち

- 一、死の前——靈魂存在の證據、
- 二、死の刹那——死なんとする人の現出——二重幻影——神祕的現象、
- 三、死後——死人出現——死後の靈魂、

本著の唯一の目的、著者の唯一の希望は現在の實證科學を竿頭更に一步を進めて眞理の探究に進めて行きたい。そして能ふ限り充分満足な結果を挙げ度いと言ふ事である。

複雑な著作の第一卷は肉體組織と無關係に人間の靈魂が存在することを證明したものである。予は凡ゆる哲學諸説上の至高の教理、最大の事實は要するに此の中に存するものと思ふ。

死とその神祕

定價 貳圓八拾錢

有 所 圖 版

大正十四年六月十日發行
大正十四年六月十日發行



譯者 大沼 十郎

發行所 雄 鐵 原 北 者 行
合資會社アルス
東京市小石川區表町九百九十九番地

印刷者 山本 源太郎
東京市牛込區五軒町四十四番地

發行所

東京市小石川區表町一〇九

合資會社

アルス

電話小石川三五七〇番
振替東京二四八八八番

補増訂改
成創類人及物生宙宇
著 美重井石

近代科學の精粹・世界學界の驚異

人類は如何にして生じたか。生物は何處より其生を得たか。虚空茫々たる大宇宙は如何にして創成せられたか。此の疑問は古來人々が最も知らんとし、しかも永遠不可解の謎語として、神話や宗教の陰に一縷慰安の光を求め、生物學の異常なる發達となり、此等の神祕は今や漸く其真相を明かにせんとしてゐる。本書は著者が、其專攻の生物學の見地より、廣く近代の名著を渉獵し最近諸學說の真相を捉へて、此大問題に對して犀利なる科學的解剖を試みたもので、全宇宙地球及生物人類の三篇に分ち、無數の珍奇な挿圖を附して當て知らざる新事實、當て紹介せられざりし新學說を深遠なる文章と、不易なる字句を以て説けるものである。本書の如く難解なる科學的知識を述ぶるに趣味溢るゝが如く、恰も物語を讀むが如き盡きざる興味を喚起するものは眞に學界絶無である。實に本書は近代科學の精華であると共に、永遠を思ひ無窮を偲ばせる一大哲學書であり、本書を讀んでその人生觀に動搖を起さざる人果してありやを疑ふ。讀書界稀有の名著として薦む。

挿圖・原色版・別刷寫眞十葉・寫眞版凸版百餘圖

錢七拾料送・錢拾八圓貳價定

著 シオリマラフ
へ界世の知未
譯 郎太十沼大

科學的に解明せる靈魂の神祕

科學の前には神祕はない、超自然はない、不可思議はない。佛國の天文學者にして精神科學の權威たるフラマリオンは千古の疑問として殘されたる靈魂の存在、幽明の交通、豫感、遠感、透視等驚悸すべき心靈的現象の實例四百餘件を提げて純正科學の立場より之を解剖し、未知の世界の實在を立證した。今後の宗教、哲學、科學は未知の世界の開拓によつて將た一轉機を劃せんとしてゐる。理學博士平山清次郎氏は「本書は六百餘頁の大冊であるが一氣に讀んでしまつた程面白く且つ有益であつた」と激賞されてゐる、以て本書の價值を知るべきである。

宗教・哲學・科學の一轉機を劃す名著

錢八拾料送・錢拾八圓貳價定

異驚の界物生

著 美 重 井 石

豐麗無比の筆を以て細叙せる生物其他の驚異

科學は常に我々の前に未知の世界を拓いてゆく。科學の鋭い解剖は、宗教や哲學が與へる力以上に、我々が驚異の中に生きてゐることを、はつきり教へてくれる。本書には主として、小さい生物の世界が描出された。大自然の叡智が、かくまでも宇宙の隅々にまで周到に行き届いてゐるのを見て、我々は更に敬虔な驚異を新にせずにはゐられないのである。

容内の書本

◇秘密に閉された海の底◇水母の毒◇海螢◇蛙の子供
 ◇蚯蚓の子供◇親に似ない子供◇龍の落し子とヤウツ
 ウオ◇トゲウオの奇習◇陸を歩く魚◇砂濱の動物◇蟬
 の生活◇蟻の共同生活◇阿弗利加の御者蟻◇蟻によく
 似た白蟻◇寄生々活と退化現象◇杜鵑の道德◇天氣の
 化石◇月の話◇世界の終りと變光星◇科學的に見た新
 年の意義◇性の起源◇人工單爲生殖と精子の使命◇優
 生學と婦人◇附錄科學小説波の音

三色版二葉寫真版五十數圖

科學界の第一人者石井氏の興味津々たる新著

錢八拾料送・錢拾八圓壹價定

書叢識智學科ルブアフ

著ルプアフ・イリンア

此の「フアブル科學知識叢書」は、フアブルの此のいろんな科學の話の本を、日本の子供や大人にも是非讀ませたいと思つて、其の一冊々々を翻譯したものです。科學の知識は文明を産む母です。そして、其の知識は苦しんでではなく、面白可笑しい話の中に、容易に得られて行くものなのです。此の本なら、少し大きくなつた小學校の、子供にでも讀めます。中學校や女學校の生徒には勿論のこと、また科學の知識を持たない不幸せな、大人や、自分の子供や弟や妹に、面白い科學の話をしてやらうと思ふ大人には、此上もない讀物です。

◇小供に科學智識を與へやうとなさる學校家庭の好讀物◇
◇フランスでは大變な評判で小中學の教科書として推奨◇

書叢識智學科ルブアフ

自然科學の話

大杉 榮 著
安成二郎 共著

子供は何でも知りたがりです。目に觸れたもの、話に聞いたもの、總てに其好奇心を動かして、うるさいと思ふ程次々と質問します。子供のこの小さい疑問には、どれ程美しい立派な芽が含まれてゐる事でせう。が多くの場合、此の子供の質問はうやむやの中に葬り去られます。何故なら、この子供の質問に、完全とまでは行かなくとも一通り説明出来るお母さんは極く僅かだからです。一般科學の發達の根元をなすものは「もの」に對する驚き或は不審である事を知つたなら、世のお母さん達の思ひ半に過ぎるでせう。何でも知りたがる子供の心の富を増すために、そしてまた科學の知識を得る機會のなかつた不幸な大人に、或は子供の知識を眞直ぐに延びるだけ延してやらうと思はれるお母さん達の顧問にこの本は今までに云ふ事が出来ません。科學の知識は文明を産む母です。そして其の知識は苦しんでではなく、この本にあるやうな面白可笑しいお話の中から得られて行くものです。

錢八拾料送・錢拾五圓貳價定

終